

地  
二  
四  
九



木曾路名所圖會

四

915.5  
327  
Vol. 5







陽鴻天神



妻急稲荷  
聖堂

神田社  
日本橋

牛頭天王  
社八穀

横書社

人元社

本曾路名所圖會卷之四目錄

本第四回、二

上諏方  
富士山遠東

麦けりけ

さきり

富士

さきり

代明

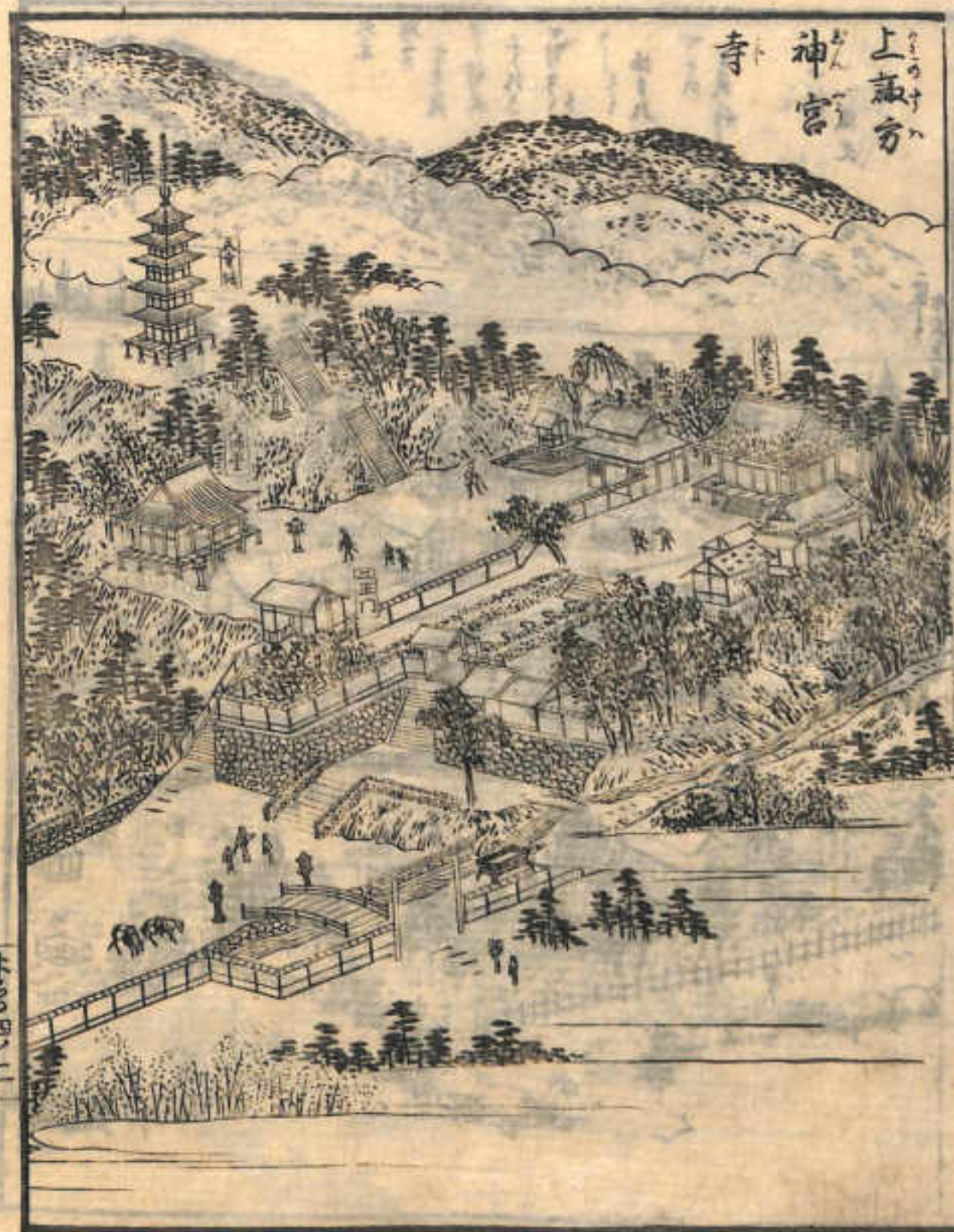




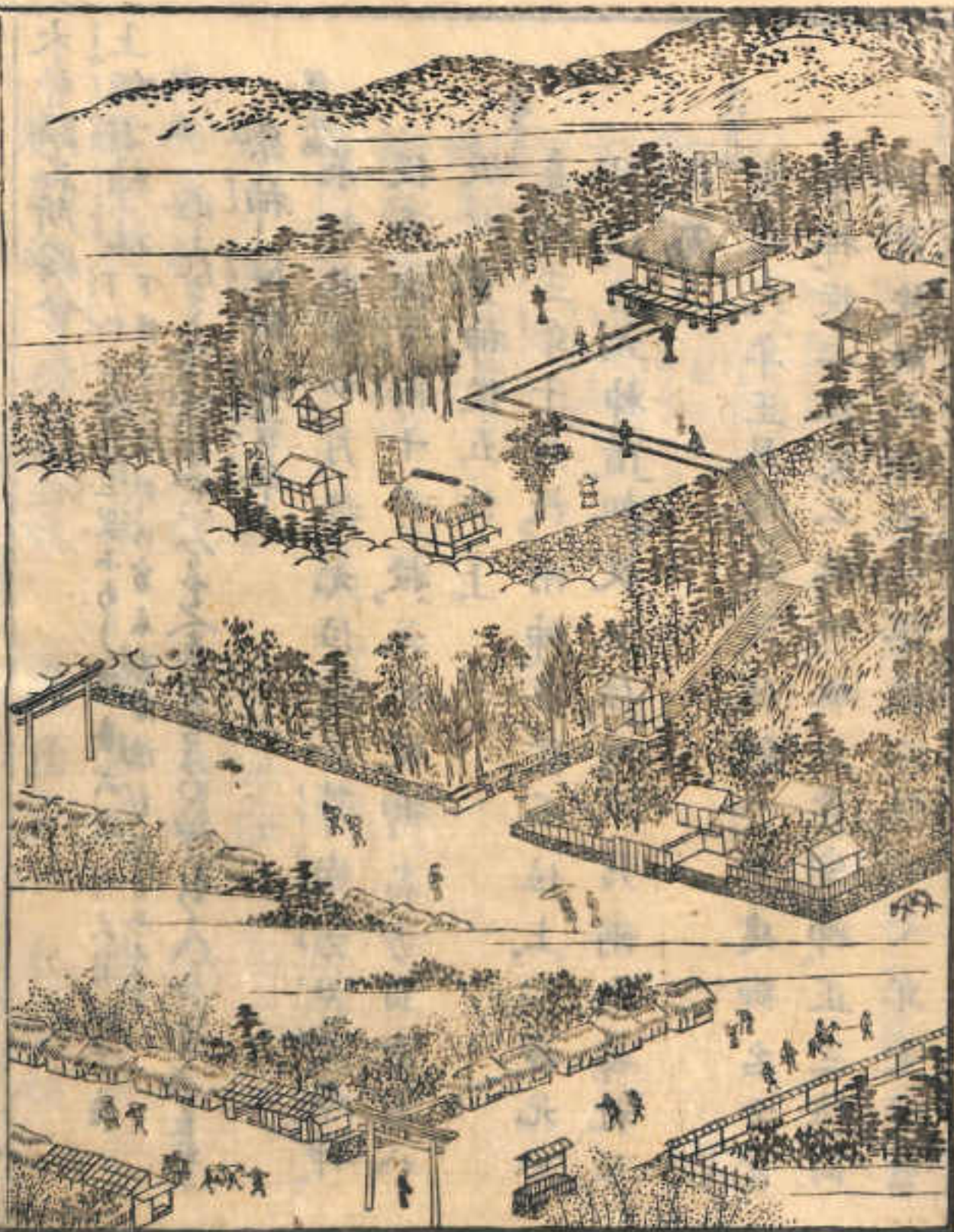




上方  
神宮  
寺



本方四ノ二





木曾路名所圖會卷之四

上諏方神社 下諏方より三里あり延喜式名神大月次二座

新集

あつたなる瀬波のさみろをくさるを育む神のちひる 永貞親王

祭神健御名方富

續日本紀

養和九年四月授无位勲八等南方刀美命神

從五位下同十月授无位健御名方富命前八

坂刀賣神從五位下

天德實錄

嘉祥三年十月授兩神並從五位上仁壽元十

月進兩大神階加從三位同八月兩大神祝預

把笏

三代實錄

貞觀元年正月授正三位勲八等建御名方富

命神從二位從三位八坂刀賣命神正三位同

二月授兩大神正二位從二位同七年七月當

郡水田三般為南方刀美神社田同九年三月

進兩神階加從一位正二位云云

拜殿 南向日美禰神社のめづり所なり

御供所 殿の東

文庫 同前

祈禱所 石の隙に

繪馬殿 殿の東

護摩堂 法馬殿の西

三十九間廊下三十九所の末社あり

所政大明神

前宮社

砥並社

若御子社

柏手社

楠井社

大歳社

荒玉社

千野河社

溝上社

瀬大社

玉尾社

穗護社

藤島社

内御玉社

鶴冠社

酢藏社



習焼社	御座石	御飯穀	相牟社
若宮社	大西御庵	山御庵	御佐久田
関庵	八鈕社	小坂鎮守	鷺宮明神
萩宮明神	達屋明神	酒室明神	下馬明神
御室明神	御賀摩明神	砥蓋山神	義余會美酒
神殿中部屋	長廊社	以上一棟廊下之側に鎮座	
大福殿	廊下の入口		
御柱	廊下の内		
大黒天社	本社の外より		
勅使殿	其外未社二あり		
六角井	社内東方		
神樂殿	日東の方		
御手洗井	六角井より		

金堂 神宮寺の山よりあり  
五重塔 金堂の傍にあり  
撞堂 撞の傍にあり  
釋迦堂 石殿の下  
大昨堂 釈迦堂のあり  
神宮寺 真言宗  
當社と料地の圓一の宮ありて特小上誦方を神領度くして  
社美濃より例祭を年中七十九度あり其中小毎季三月圓日  
三つあり中を用ひ二つあり初を用ひ麻の頭と七十九組の世神  
小供を又別は麻の肉が料理しそふ社人も其麻の肉を食ひ他人  
麻肉を小獻と食ん中ふ附は神小供して社人より箸を更て食ひ  
様形しとぞいひ傳へ上下は小七奉に一度  
あり遠近四方より詣人多く集りて其祭式者多しなり







諏方湖

下諏方

神宮寺

高橋城

諏方の開城

この水は

うき水の

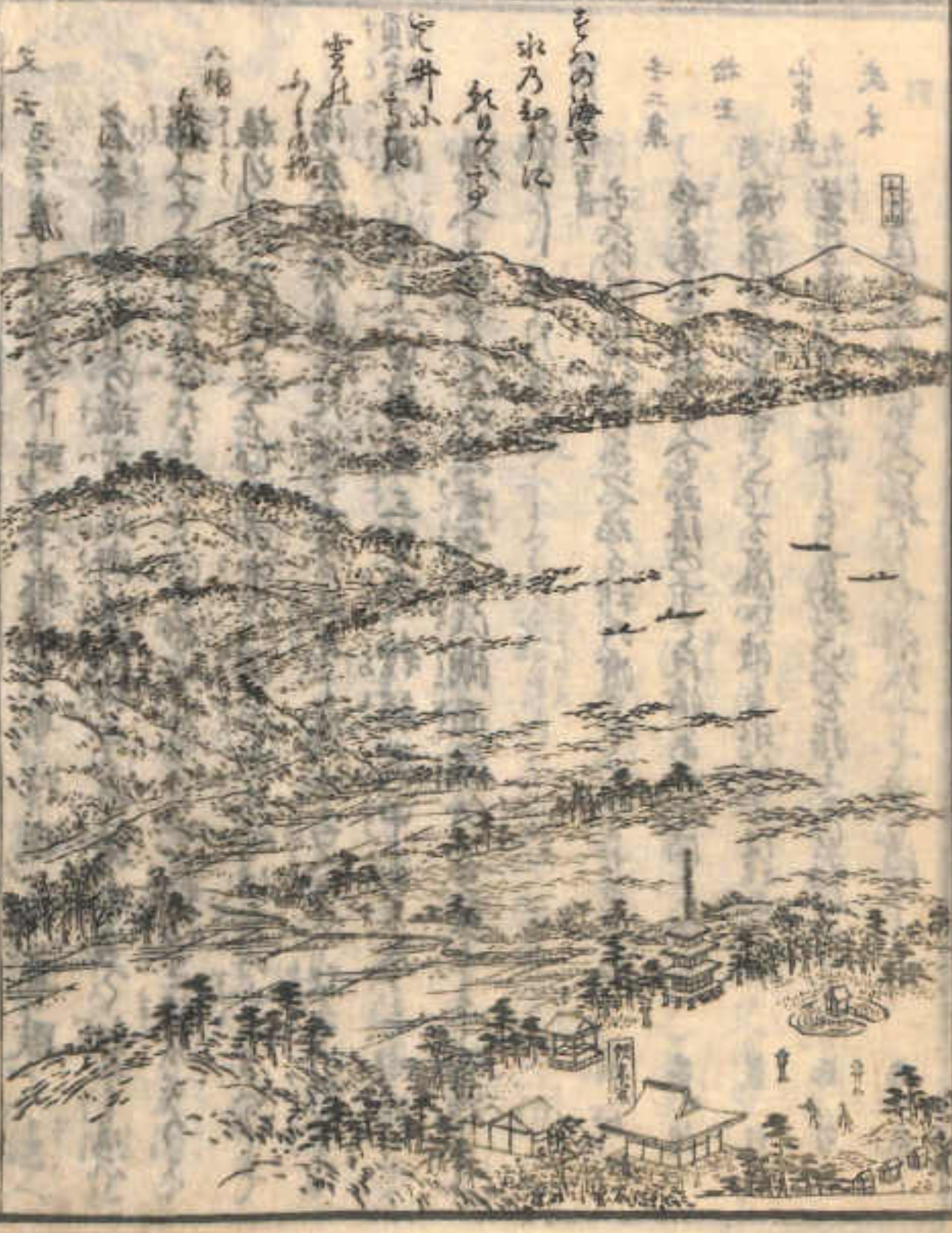
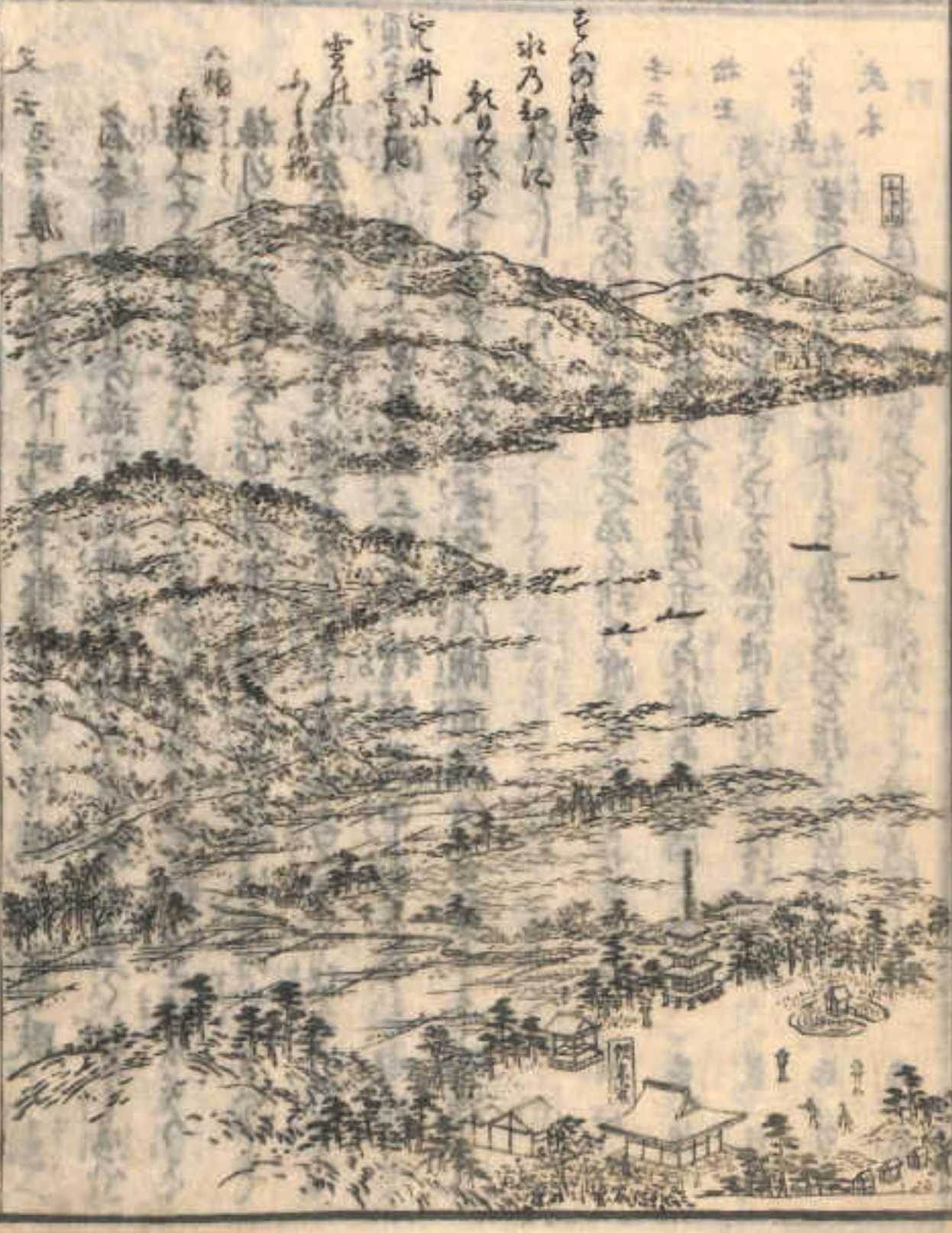
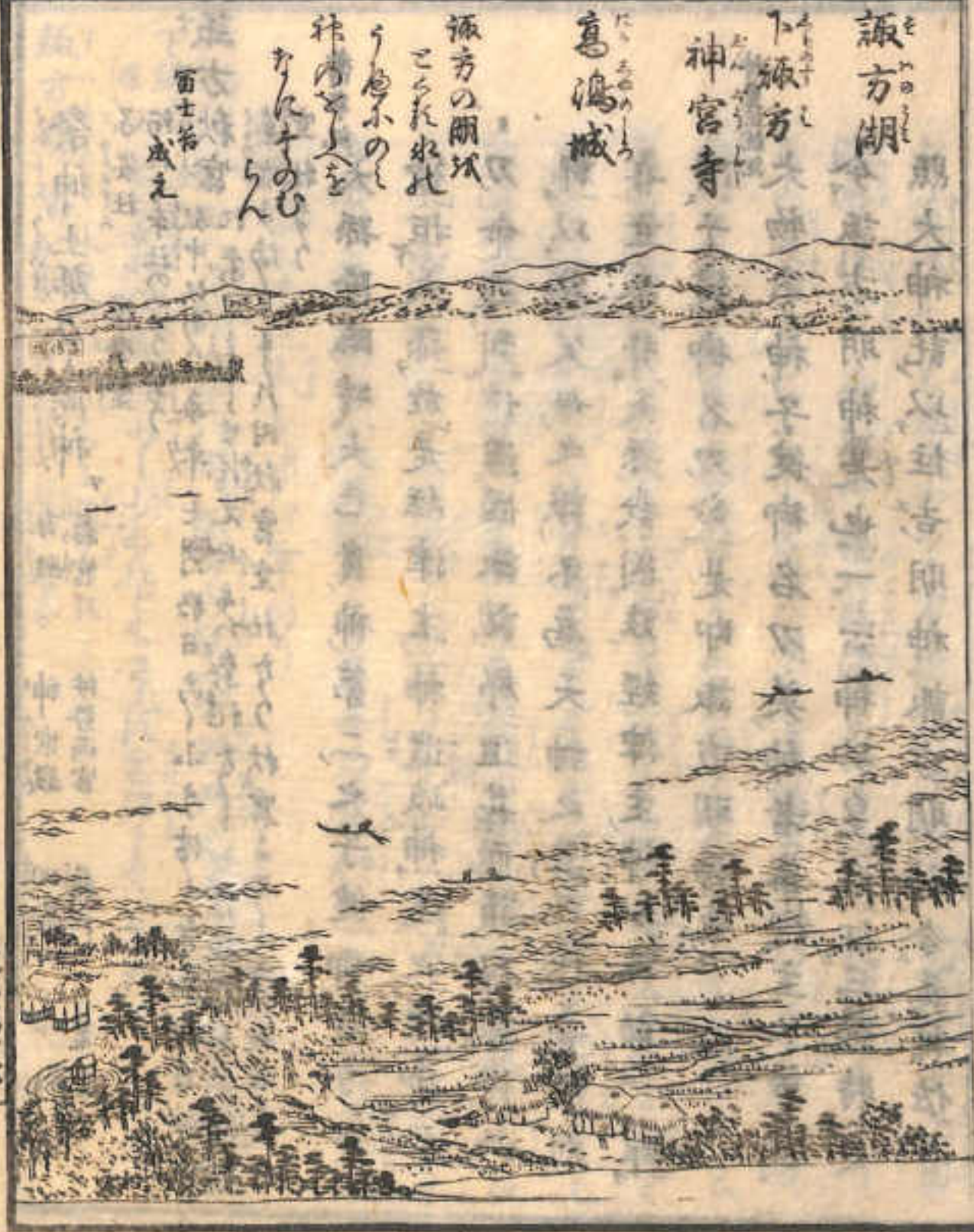
神宮寺を

かたむく

らん

富士

成え





又云 清濃 諏方 下野 宇都宮 專持獵 供鳥獸

下野 諏方 此街道の駅ありて 諸舎多く 舟車一泊ふ

耕ふるうれ 女たち ひとあひてく や 神ひさ 秋 霜 降りく

横ひれく 乃 是とて 町の中に 温泉ありて け 宿の 女ありて

湯屋の 女ありて 浴させ 其 女 湯の 女 多く 舟車 此 秋 舎く

頃 諏方 湖 周 十一里 餘 直 三里 許 裡 耕 屯 甲 あり 今 水 澄りて

い ありて なる 其の 秋 玄 雲の 水 湖 面 風ひ けりて 水 澄りて

す 水の 澄りて 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて

す 水の 澄りて 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて

す 水の 澄りて 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて

す 水の 澄りて 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて

す 水の 澄りて 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて

す 水の 澄りて 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて

す 水の 澄りて 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて

す 水の 澄りて 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて

す 水の 澄りて 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて

す 水の 澄りて 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて

す 水の 澄りて 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて

ま けりて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて

す 水の 澄りて 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて

す 水の 澄りて 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて

す 水の 澄りて 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて

す 水の 澄りて 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて

す 水の 澄りて 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて

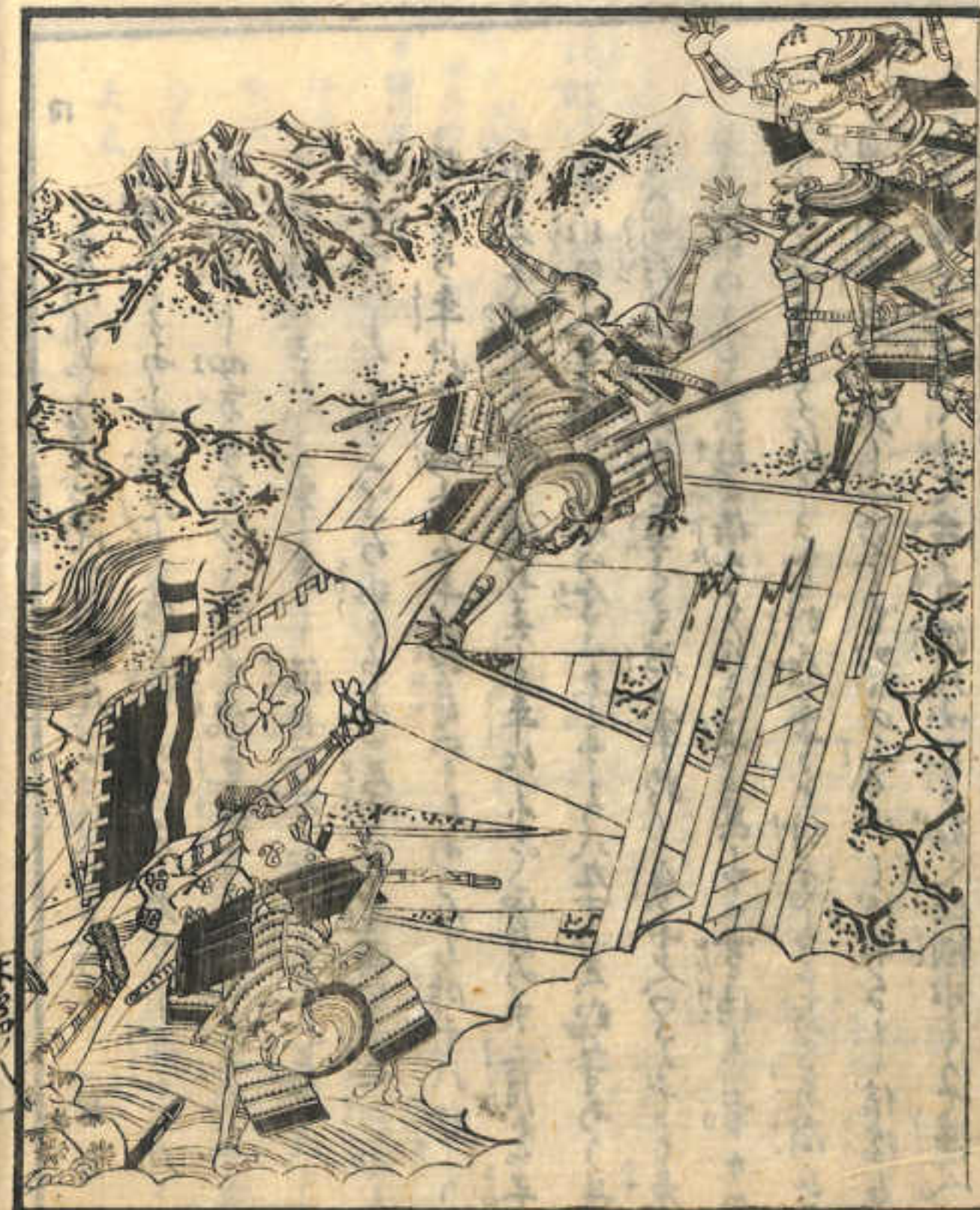
す 水の 澄りて 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて

す 水の 澄りて 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて

す 水の 澄りて 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて 水 澄りて



武田勝頼  
 我勇魔を  
 自負して  
 神佛とぞ  
 世にそと  
 赴きし時  
 忽ち板橋  
 多し幸  
 ち彼方  
 出たりと  
 汗とろろ





水の下に網を引き水引せしより又奇異の業なり水引を引長く  
うめて其筋より網を入す其先はうら行乃竿を持て水引を  
す所より次のうめたる所をもあみを送る處にて我所のうめ  
あくるうめりて網を引くよりて魚とさびりていれあくる  
くる幸と知れりてそまゝ漁人をもとめりてさびりて又水引を  
漁る所より腰は長尺竿を握むるあくるて入るも竿あくる  
死とすぬるもせりて或は沈没の人あくる番は水引を引く水の上と  
り小網なくあくるてて屋を構へり

高鴻城

下の高方よりそ里小あり諏訪因幡守及居城に二万石味  
出自由かを以味と山幸島助晴幸能張をとり

衣裳濟

夫本

傾波のうみと耕とみきたるあくる日午じまゆりはのそ  
すの海衣が諸本とて見れい富士のうみとあはれりて

諏訪

温泉入下諏訪の湯の味と山幸島助晴幸能張をとり

富士

富士山眺をよりと耕とみきたるあくる日午じまゆりはのそ

天龍川

水源の湯の味と山幸島助晴幸能張をとり

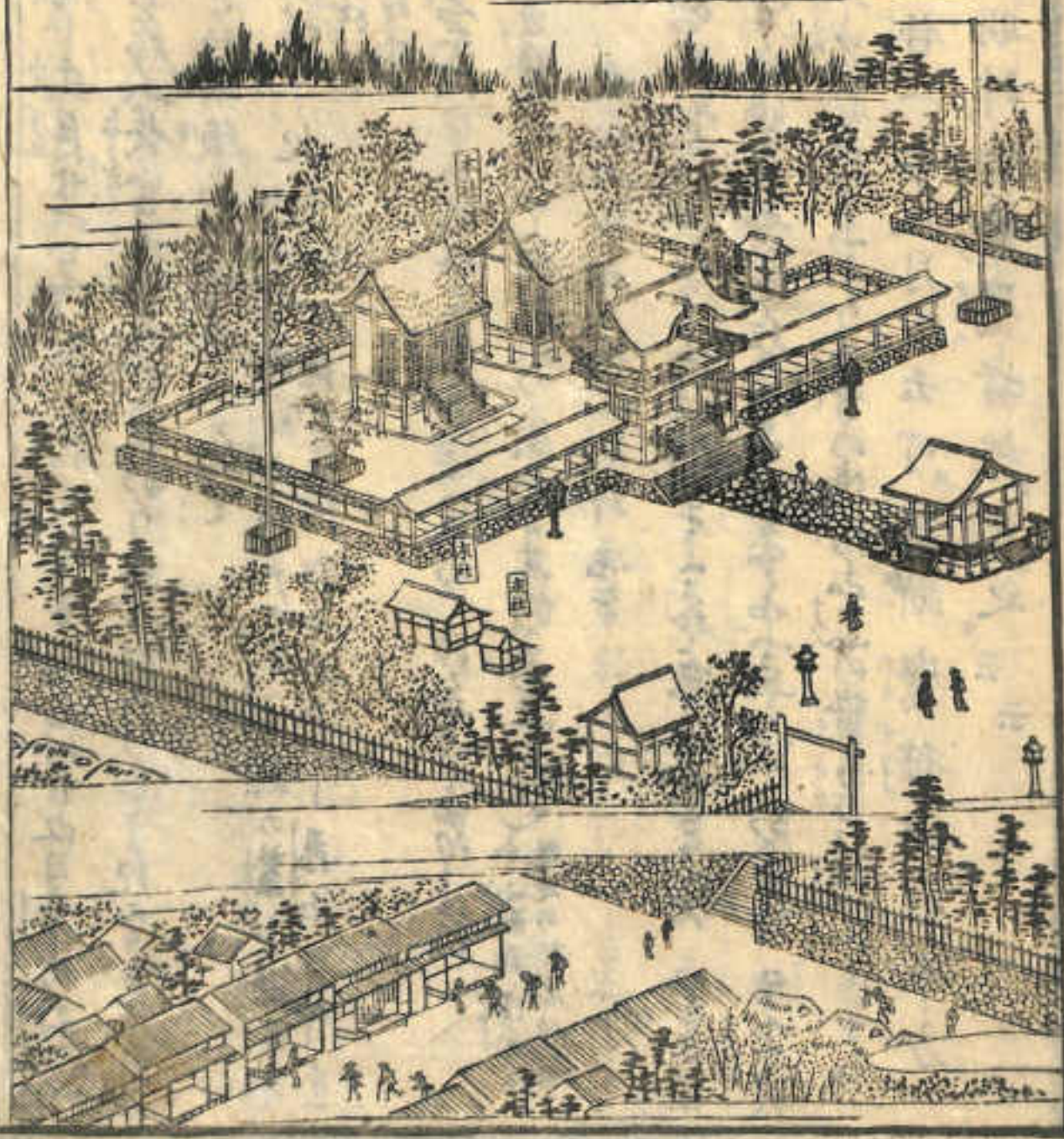
御射山

射と矢の精清なり

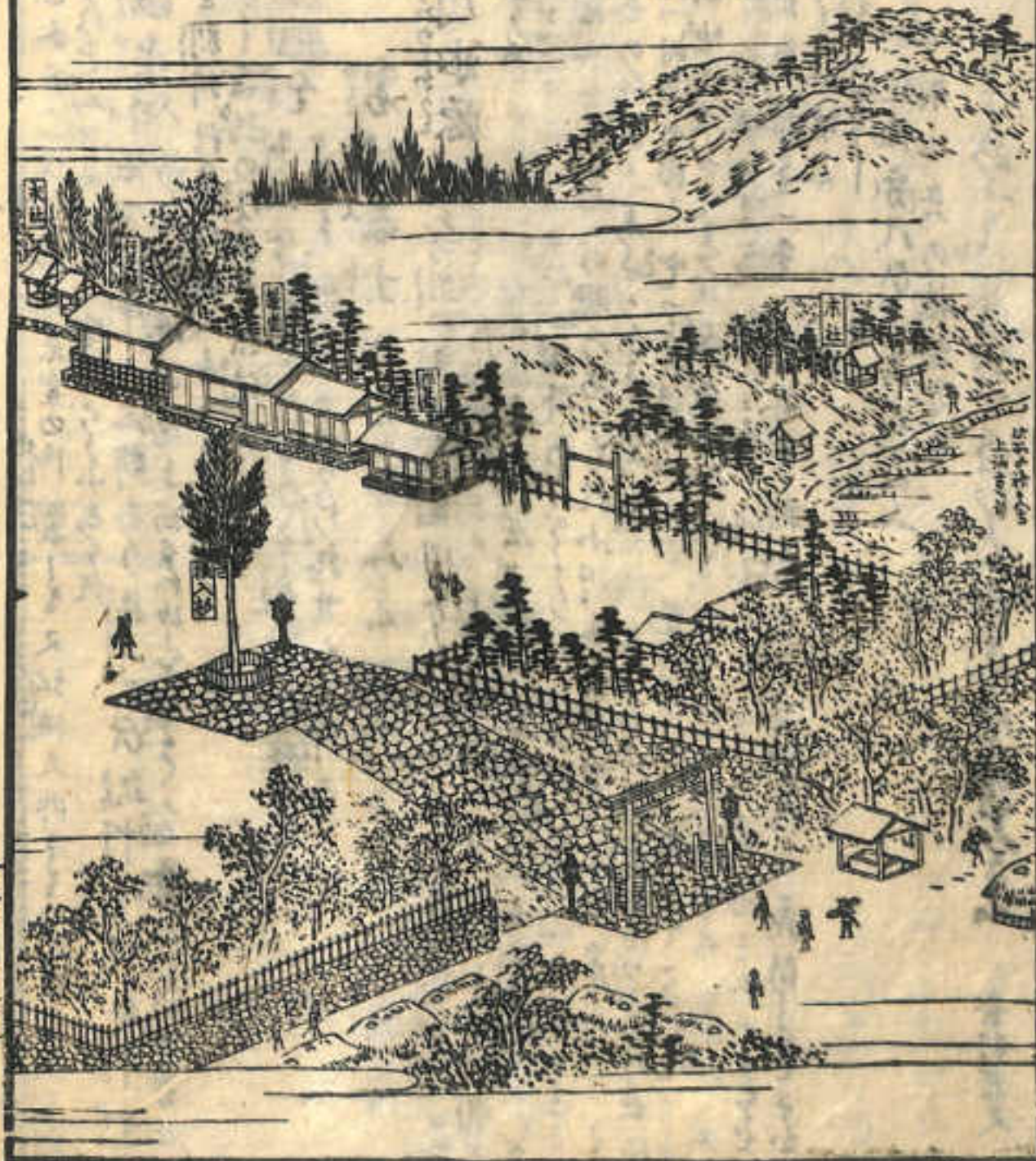


道達院

換題  
宮程  
芳子  
まきん  
君のへ  
うこう  
天乃下  
史乃下



下諏方  
秋宮













と攻滅する企て密に武田の臣に勝頼を誑め常に其備の怠り  
 致す責を負うるあり武田の幕下三列山家三方の内他子の城  
 主奥平光世身負能其子九郎信昌去月八月より遠列候松河  
 随所して月長條城小楠籠る勝頼は幸城より怒り多しと  
 出馬ありて長條城と攻められしやと云ふ三年五月中旬甲辰  
 の銘と出馬せられお従ふて武田道遠軒信連穴山左衛門を  
 入道梅雪一條を信を文信龍武田左馬助信豊武田兵庫助信重  
 直田源左衛門尉信綱を始として教合其勢一帯より勝人々を圍く  
 所所諏方大明神小基清ありて被りて進み進み下りて  
 かの小馬山向て被りて既小基居の森に迫りて討法玄よりお傳  
 ふ龜甲の持陰梅極盡の下より折るるを右側され其より遠  
 へ急ぎひたり板橋馬より涉渡りありて小基を堅固しけり  
 橋あり中程より遠くおれて舍人をけり小基衆三人と死せり

河馬逸物といひ特小勝頼馬上の達者也て甲より被りて被りて  
 まうより河身小基もさうさうありて今度の合戦いふありて  
 難人といひ松諸なるを理て被りて被りて被りて被りて

和国大嶺

義盛の城ありて東坂村立場所て是より廿四所ありて西坂屋敷あり  
 又廿四所ありて和国寺ありて此の城の事といふ空快助なる尉と武士山  
 見ありて坂ありて東坂をさうて三月の末まで雪ありて多し地は甚  
 多に門の嶺より被りて東坂屋敷村ありて村より立場所の事ありてこれ  
 上和国と云ふ里六町之に山中に名草ありて西側九幡茶下毛虎虎虎  
 約陸系は雪陽ありてやうありて茶花見あり

旁より一蹄馬をちりてや和国寺

上和国

長久保中まで武里に駒の部より八幡の角より被りて和国寺義盛の  
 雲城ありてより右の出けより川橋ありて和国寺とす



長窪のふふ大門村あり街道より遠ある下田を之場  
に、常陸より深山に村青原なるを、小孫形あり後田川小大橋小  
橋十間許あり、而は深き水田より、落車を大門道より、あり

大門許又大門村のふふありむ、武田領去せ佐羽領

小笠原長時村上義清両家の軍勢一萬三千餘人、大門許へ押きたる  
武田家の軍勢も、許へおん、維せ、中、其時、時信、小笠原、内膳、正、掛、山  
十、年、を、備、あ、ん、を、さ、り、と、物、見、ま、仰、付、ね、た、二、人、お、時、ま、と、時、信、一、が  
が、と、時、ま、と、時、信、一、が、と、時、ま、と、時、信、一、が、と、時、ま、と、時、信、一、が、  
見、と、然、も、後、小、備、一、二、表、子、中、で、軍、と、ま、と、と、懸、る、維、せ、中、の、時、信、言、  
左、わ、は、時、方、の、備、を、せ、と、て、八、藏、の、禁、甲、列、通、抗、が、京、に、陣、を、捕、り、  
法、勢、の、内、足、輕、隊、將、様、田、備、中、守、月、子、息、六、十、年、甘、利、が、ま、加、門、一、乃、  
先、小、備、ま、二、の、身、益、利、と、あ、る、月、多、田、津、治、嫡、子、新、虎、と、時、ら、又、ま、  
板、垣、小、加、門、と、時、二、の、備、の、先、も、は、安、間、三、藏、の、尉、を、領、家、と、時、加、門、と、

三、の、先、も、小、備、を、虎、昌、後、と、之、堅、む、本、陣、の、和、備、と、士、大、將、京、加、賀、守、昌、後、  
右、備、と、京、加、賀、守、虎、亂、小、備、と、時、守、虎、盛、左、陣、に、市、川、赤、女、正、子、二、乃、  
京、と、左、備、月、子、の、弟、後、備、と、武、者、奉、以、加、藤、駿、河、守、昌、頼、多、田、津、治、  
在、後、市、川、入、道、梅、印、と、り、後、の、處、小、信、及、時、大、門、津、治、打、越、と、村、上、家、の、  
先、手、布、下、平、治、入、道、知、十、軒、其、外、東、徒、の、者、せ、何、と、も、奇、心、の、列、と、云、  
懸、合、の、法、と、相、計、と、知、十、軒、中、小、備、が、進、先、横、田、備、中、守、が、先、小、押、  
め、れ、而、陣、関、を、令、と、砲、弓、に、迫、合、と、始、の、時、信、を、捕、へ、互、中、場、と、  
せ、ま、ひ、る、平、治、入、道、の、大、剛、の、者、り、と、多、れ、自、徐、以、退、と、て、士、率、と、  
知、一、真、先、小、突、て、め、甲、列、勢、平、治、入、道、が、働、小、け、ら、と、れ、一、所、待、り、  
退、く、と、時、を、安、と、氏、思、ひ、て、二、の、手、れ、甘、利、押、と、つ、勝、と、し、る、信、列、  
勢、と、備、と、り、之、を、時、小、加、十、軒、戦、や、け、と、時、の、方、へ、引、れ、を、武、所、退、と、  
備、が、机、と、引、退、く、次、小、笠、原、長、時、の、先、手、時、信、と、多、田、津、治、守、也、  
が、け、合、せ、と、入、机、と、時、ひ、一、が、小、笠、原、勢、一、致、本、陣、ひ、し、け、大、勢、計、と、

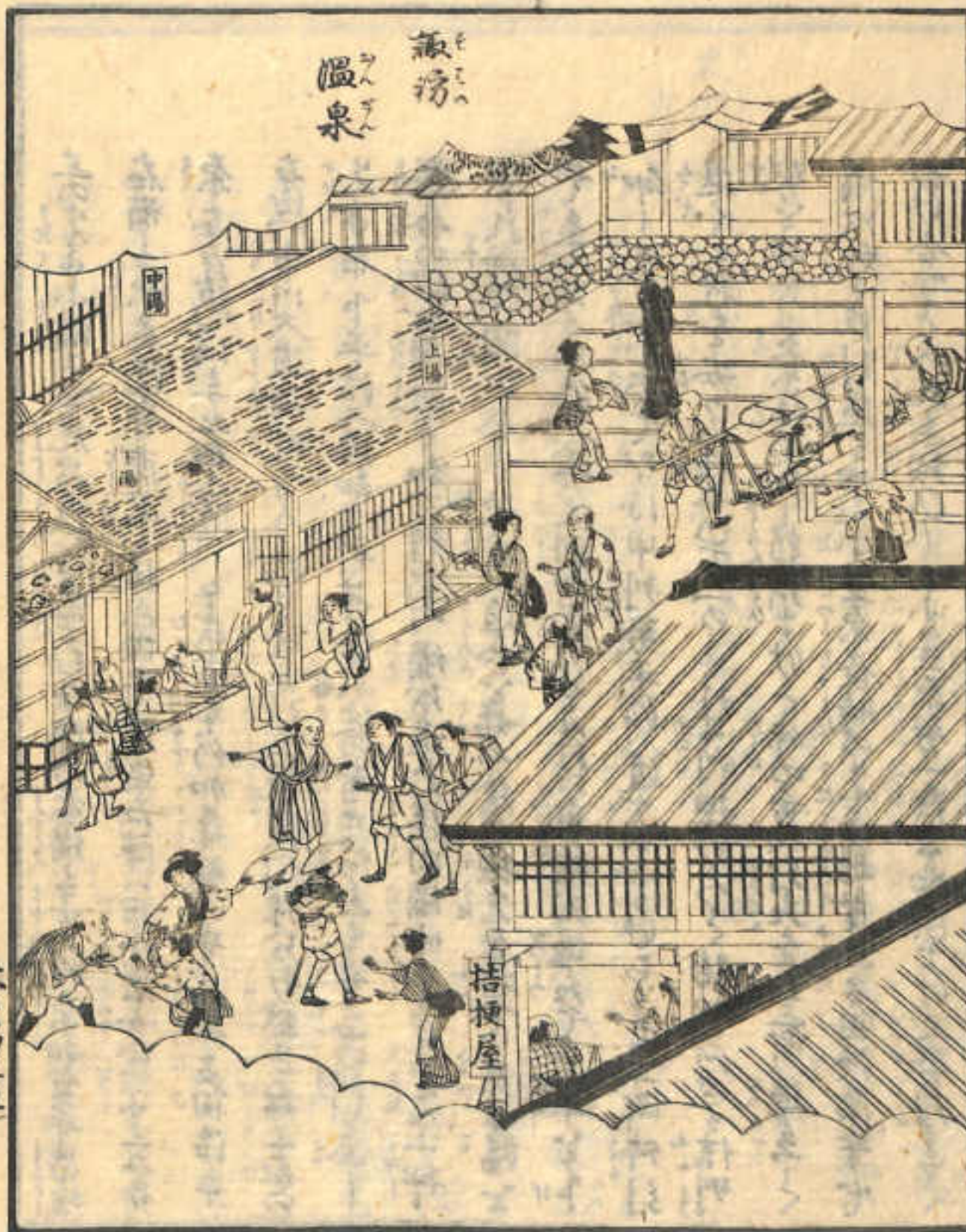


水も  
あつた  
いん  
ちや  
は  
井の  
光る

ま



飯  
湯泉





信列一乃の先鋒兩度共ふら負一は之將義清之弟也我旗幸  
とてつて勝敗を一戦中せんとす戦ひのつて押さふ安間が勢信  
兩方主小陰瓜入とて必死と戦つて信列勢の多勢とて大將義清  
一戦中とて突あふんと戦ひのつて進めは安間が勢戦ひまけく  
四度路に形れくす所并引退く二の身も備へ飯家兵士率  
勇て村上勢も突のれ大將小笠原右馬助長時米牌を取て其  
の勢も馳合せ進めは内戦する其時旗本の赤備する赤加  
昌後様陰小突入へんや妻手の方へ備を押し入れ大將時信自  
米牌をぬく旗本とりつたの方へ押さへ赤加守の備く右  
より秋江中にて様陰小突入へんや巴の字も白字の字も秋江  
突あふれその信列勢時信昌後兩備の様陰小役走してその中  
形れく散れを先手の二備をわけて進めを限る小印を揚げ其首と  
料家に恨面一千七百廿二級ありは方合秋江者祇を恐むる者

信濃 長瀨

石荒坂

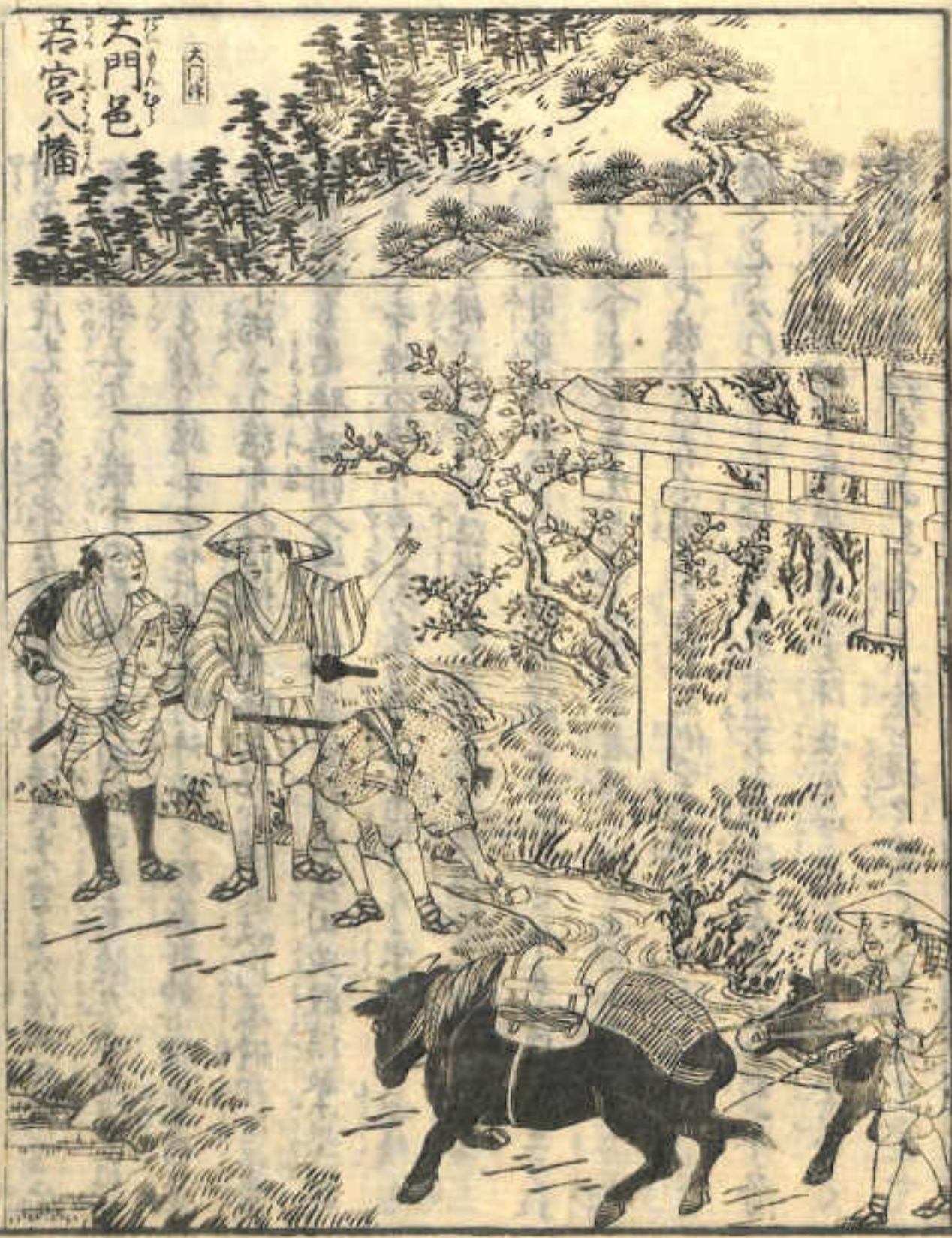
石刻坂

信濃 蘆田

難兵合々く三百餘人なり 夢は時虎を考られ 軍記あり  
蘆田も一里半は驛の民居二箇所を有むお對しと巷と  
かへ其勢わたり小散立に  
石荒坂 上は所より 石荒坂も十五里  
石刻坂 上は所より 石刻坂も十五里  
至月廿一里八町 芦田何某が賊跡ありは駒小服菜と賣  
海聖平と信玄と謙信とは所由く合戦あり又根津村へ根津  
甚き傷あり居る所あり  
十月十九日海聖平は親とて則ちの地押出する時信山が  
時幸小幡虎盛原虎胤は二人を居れ景虎若大將とて今も項羽  
城も歎く勇将とて義清再頼とて今日の合戦も必定十九  
生くるなりとて其大軍は軍へ後者三人物見より見候あり  
中より二人則ち信玄の旗の旗印を下雲し馳走て小幡助が申



多し欲の備速なる中も濁りしよりそのゆへ合戦を持て持たし始と  
 苗衆との取合形は其の備の地は廣きことなり原山懐かやなる  
 款成程合戦を持て備臺と相見く人敷と六千の内介とせやなる  
 斯く三人又誰とせも其をたし見せ置けりや申し勝信海軍三人の  
 外もこの地は狭きことなり山幸と連対られ備の商議ある時味方  
 備の立振を悉く演古くて示虎いふ勇將もせよ味方ハ一万五千  
 餘騎今日平別すて兎角くて時刻を極め置けり方の方の吉別不  
 着死別決の大將と味方勝へさやなせりて殺せざるは郷とありは  
 敵と決すも弱き味方より未の勝利とありやせは海がり以て理不  
 中まうけあふ儀を立置けりて陣を構翼も定らる河川先手先  
 右の方ハ小山田備中守信別先方の相本市常尉至月甚ハ芦田  
 下野も友建平尾光尾耳取後路平原左と郡内的小山田左常尉  
 信長先方共長座左馬尉小者甚ハ塙五郎左馬尉和田福沢内



大門邑  
 若宮八幡











法 經

かきこむをともてを映持のよりや月をとりまた 泳重光

後拾遺

あてにや映持の月を見ればとけしおとあてりと 赤澤清門

和 苑

思ひてを映てや我身なまきし映持の月をさきほ 律野無雪

十 武

いこも月をいとしをさきほをいとしをさきほ 隆源清時

類 類

はるもや映持の方を映のほをさきほの映ていふ 竹 勢

六 帖

てる月をさきほをさきほをさきほをさきほ 後柏宗茂

六 帖

映持の月をさきほをさきほをさきほをさきほ 漢金言

六 帖

おけけや映ひとけけけけけけけけけけ ちせん

六 帖

名の月や田毎乃玉を風流し 藤 本

六 帖

眼をとりとてをさきほをさきほをさきほ 菫 骨

六 帖

さきほをさきほをさきほをさきほをさきほ ちせん

六 帖

社あり式月 今八幡村ふけ社領式月石又冠嶽の麓にあり ちせん

六 帖

巖石ありを映て映て映て映て映て映て ちせん

殿とて二間 庫裏半 巳午に向ふ幸尊と云親善教光院長樂寺や

号い酒と棚田の上小陸を神田に十八畝と云垂く神徳をまを中好

指と河く水城中央田毎乃月のうはをいひやをさきほをさきほ

とれ西にむく千隈河巳午くあをさきほをさきほをさきほ

踊ふふれり左六八歳の杜りり川と踊く向ふふふふこの地あり武

水別の神降ありやあへ一の庵をい富寺の子院をさきほの庵を

いけをさきほをさきほをさきほをさきほをさきほ

今より百年をさきほをさきほをさきほをさきほをさきほ

後をさきほをさきほをさきほをさきほをさきほ

入相の陸ありをさきほをさきほをさきほをさきほをさきほ

あへさきほの頭陀と信託ありをさきほをさきほをさきほをさきほ

級川田毎の月映石其傍小陸樹庭石小盛石室う池に映て見易し



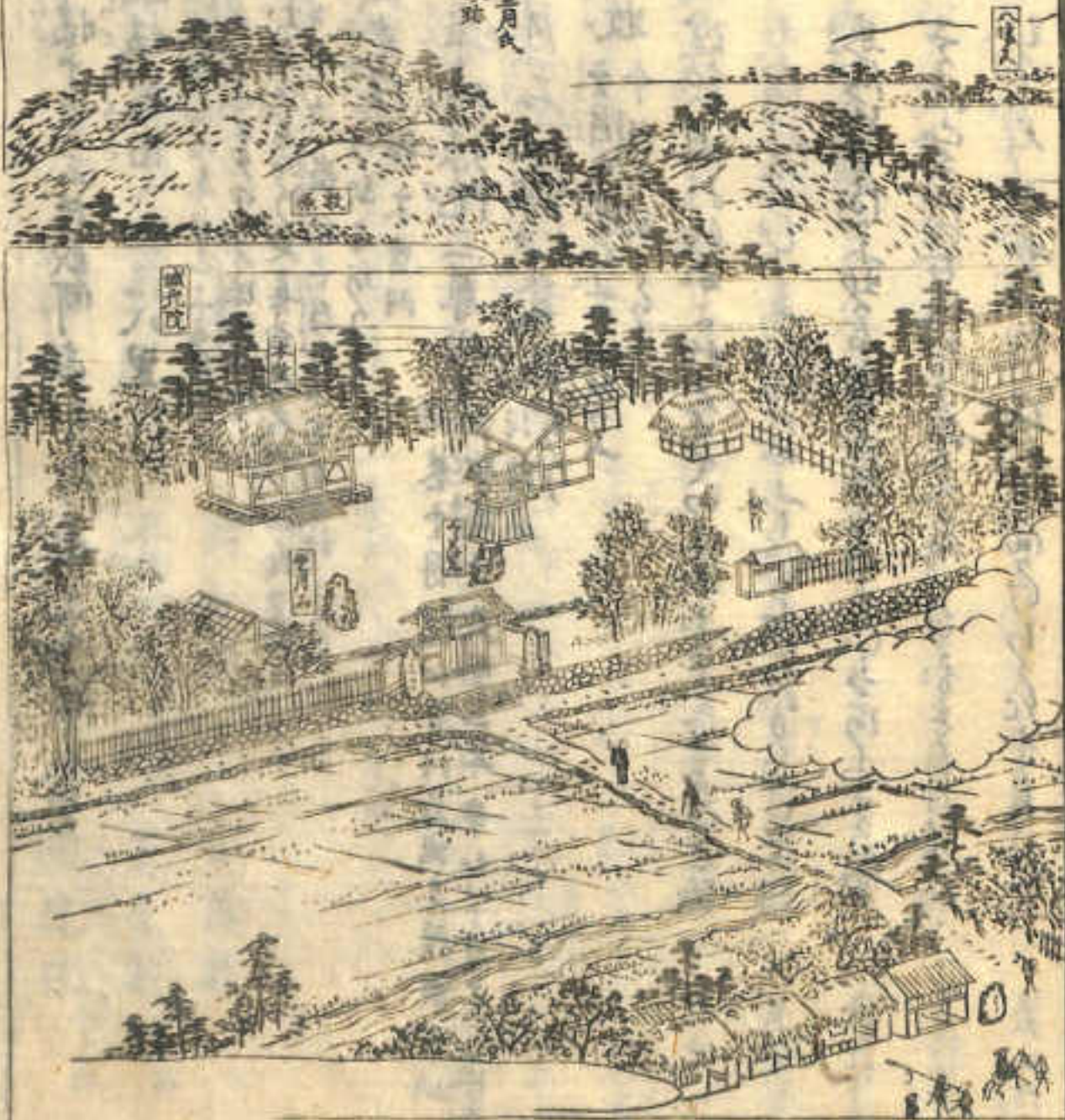




院之光亭城

望月 遠江守 城跡

豐月氏  
城跡



重刊

歇

杖の束と

あ

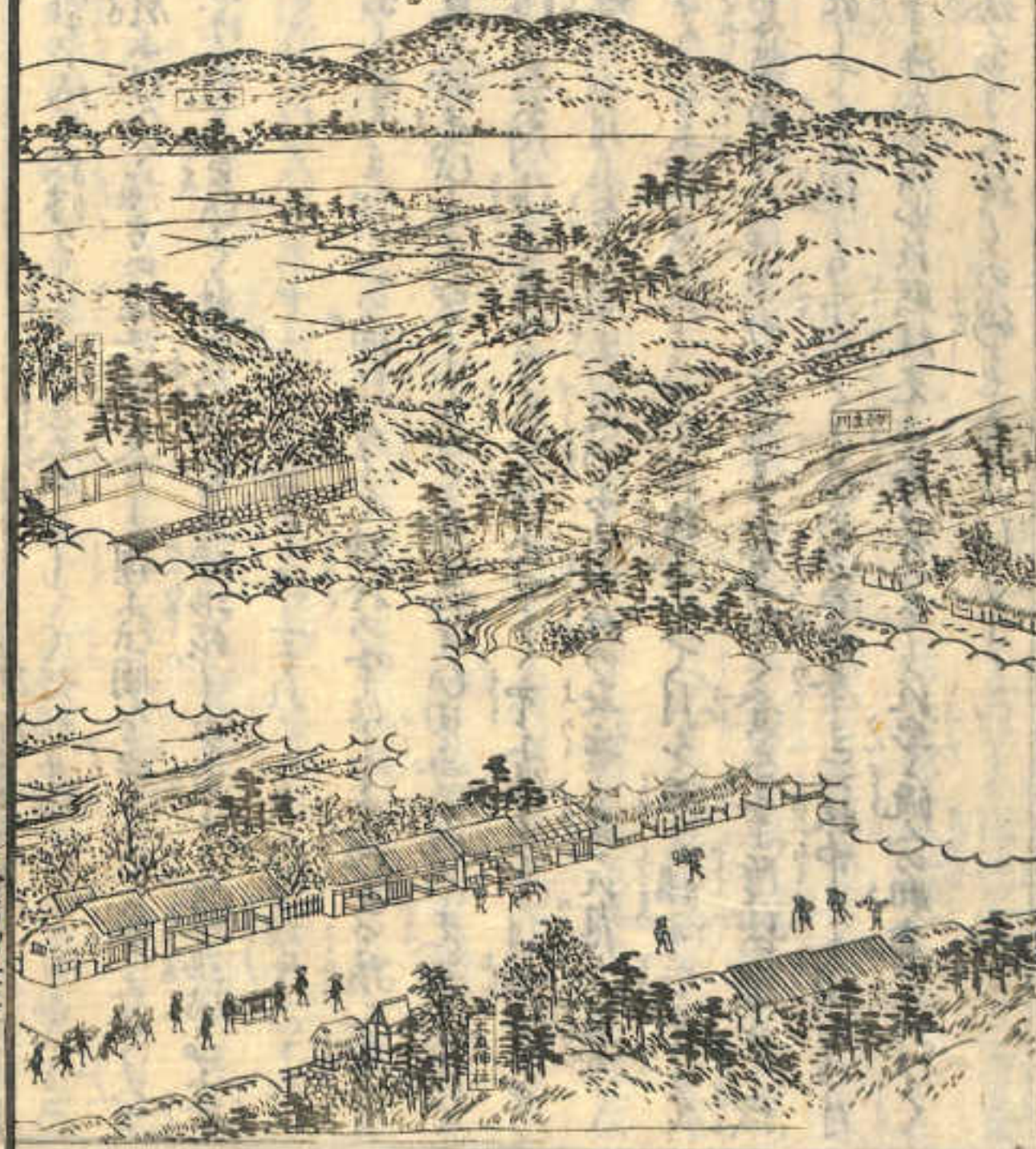
をうたの

今冬

思

け

金者





望月

八幡中や三指或所あれより若き者八十五里  
越後高岡より武指八里

金月成趾 高岡のふれ山の上あり

大伴神社 今川殿社と稱れけし生か後とん

金月山城光院 日取あり

奉尊阿弥陀三尊佛 同基金月遠の寺は名誠光院殿東山  
盛職庵主文明二年辛卯十月十七日逝去

金月石 日内 梵石あり

金月御牧 金月の歌れ上の山あり  
今地乃利とん

拾遺 逢坂の関は清和より新とていりや重んを厚志駒 紀中之

後拾 あり坂のむきより新とていりや重んを厚志駒 良運法師

金景 東海にふりつる金月の駒ありいりや重んを厚志駒 源仲正

新古 され山代の古道より又新とていりや重んを厚志駒 定家

新千 ひりりや重んを厚志駒 苑山院

五三ノ七三

後拾 年成るる雲の上並に林の影をさひきり月乃駒 後拾遺院

拾遺 金月の駒より遠く出づるありきり月乃駒 高野法師

後拾遺 金月の駒より遠く出づるありきり月乃駒 高野法師

やうい例年勅りて駒あり天皇崇徳殿より出づり信濃の

貢馬を獻覽し給ふに貞観七年十二月小制む信濃國牧馬元八

月廿九日あけ貢く今十五日申定むきり月乃駒ありいりや重んを厚志駒

むいり御牧七郷より進出みか御牧ありいりや重んを厚志駒

より又金月の駒より遠く出づるありきり月乃駒ありいりや重んを厚志駒

馬成るる信濃より本よりて一木成りきり月乃駒ありいりや重んを厚志駒

延喜馬寮式牧 信濃國

山鹿牧 諏方郡 塩原牧 同 岡屋牧 同 宮處牧 同

殖原牧 眞子郡 大野牧 伊奈郡 平井互牧 眞子郡 笠原牧 伊奈郡  
高位牧 高井郡 新治牧 佐久郡 大室牧 高井郡 猪鹿牧 佐久郡



おのゝろし 飛騨のやまこゝろより 老犬かんこゝろより



川中橋

山幸抄

上杉入道藤信川中橋に合戦し是時時勢甚だしく武田の兵あ  
るふようのけ付たる中に勝負とせんやあやうなりしやも飯盛岡  
備前れど十分すむとてあやうや兵隊方の之様とありて  
持味が備へ入れ六段信今に合戦をききや二や三信玄の  
旗中へけり入るを一時小まきとてや後陣の甘糟直に馬小池  
軍の堅固とて一や中池一や三や旗中備一や兵隊の兵を率一  
陣をけけ抜候なるも此通に信玄の床机乃備成目け突うや武  
田方の自軍備とあはれと漸く後飯盛を備と其源定山に備や  
信玄の旗中や只三備とあり場とをけりてあやうな後信玄の  
手は還兵を率一育とてな亡以死んと勇まじくは百倍して突  
入るも旗中の花備もあやうに中池二や三や長坂約米跡跡大炊助  
之やうに防とて上杉勢勇壯りて多勢なりを幸とせん

探立なるあやうに長坂跡跡の二將甚だ勇まじくがて突立られ  
散れせしけり信玄も二尺六寸の太き力めたるに只一騎信玄  
床几備も此かき信玄もなるに迎撃等に今とて御せし後信  
一やの勇とあはれ武田の去士あはれにけりてあやうに負て倒れ  
信玄も今に助る者けりて速く追ひてあやうに討たれども  
去て六段軍とあはれ幸に武功も水の池もあやうと覚悟してあ  
後信玄もあやうに助りてあやうに後信玄もあやうに助りてあ  
あやうに信玄の床机お迫り只一騎と思われしや同と案の信玄  
中をあやうに信玄もあやうに助りてあやうに後信玄もあやう  
其後相を考へられしや見たりしや駒と龍をききあやうに馬より  
切せりしや床机を破けしや切せしや信玄もあやうに小を  
刀を抜き信玄もあやうに助りてあやうに後信玄もあやうに  
ゆへに信玄もあやうに助りてあやうに後信玄もあやうに



張信小抄の主人をさうく残すも小道の邊に當つた日、おまの  
 親武者おまのて声張け張信をさうくを捕めりておまの  
 智深の綱を解け入らぬ道に幸あらずと匹士の小抄らんり  
 信云ふ何れ其首を解きておまの張信とてびびりておまの  
 小抄さう実の信云あるやせけりておまのまき入るおまの  
 おまの其市には信云ある人幸必定しと思ひまのはあつた三人を討ん  
 とおまのたつておまの山平助助入道おまの小抄の先陣と  
 試みりておまの張信小抄人と尋求しおまの双方軍で威を張る  
 一将小抄方の張信とておまのとおまの通に處に敵將張信を討  
 ちておまの山平助も崩れ張信を討ちておまの告るおまの  
 おまの山平助鬼とておまの馬小抄をさう雷電とておまの迷  
 早くおまのやるおまの陰分おまの無二無三張信月け突めくお  
 其陰分とておまのとおまの張信とておまの何れおまの我我の

筑摩川

卷之四

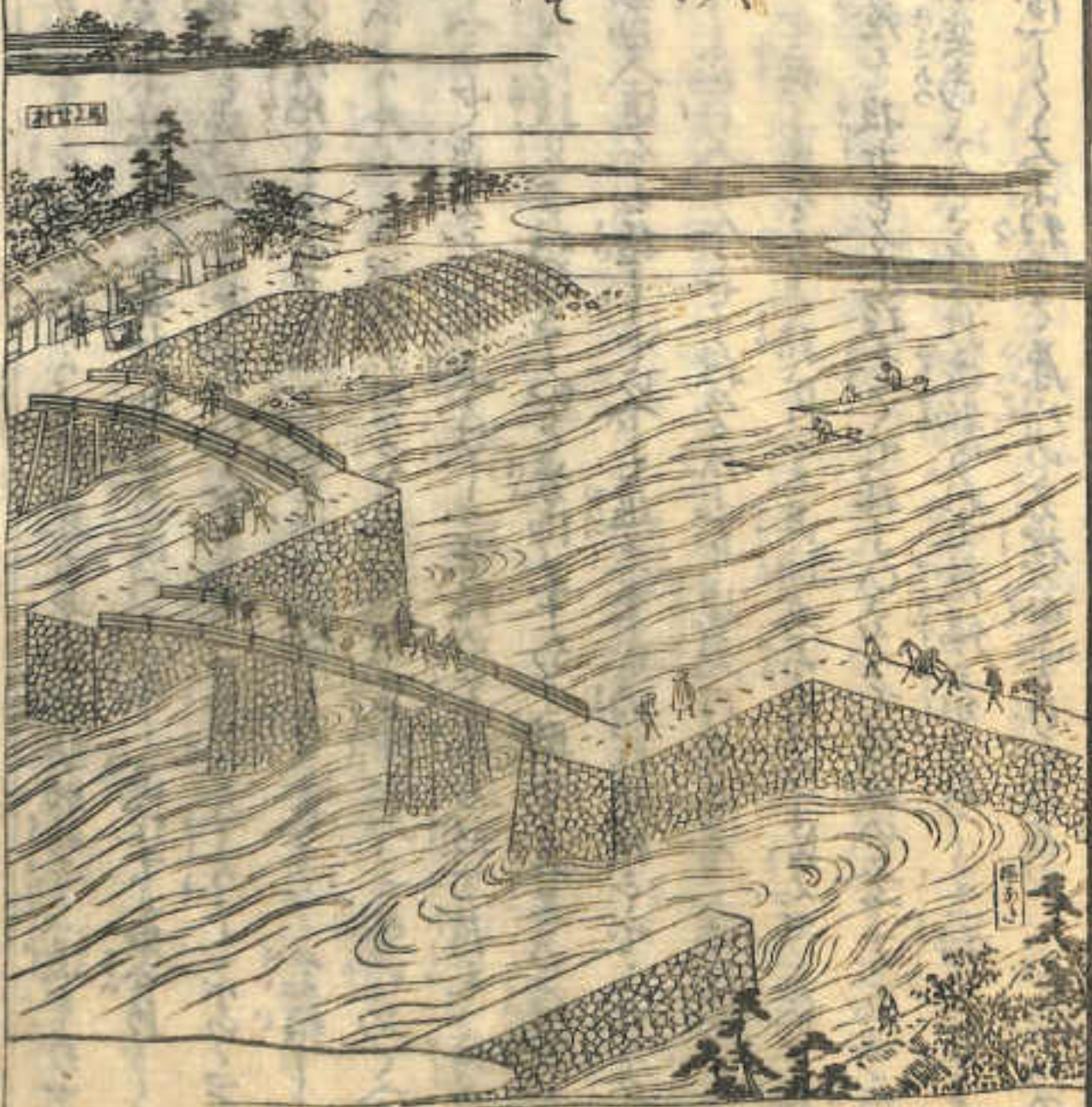
ふくみ河

死さく桃太

くけりして

三州志

義方





坊どかん半奇峰之せうろく多神を我あて山中助助時幸入道なりやせ  
名ふなる小法師如く無双の曲者永遠の老一遠信まふ聖合時  
け候退人を残念するやせられしやも續く時方とせりしやふやせ  
空しく対死も幸面なり一旦退死味方の兵とて母あんと是候一  
中お成りしや馬成退れりやを助助入道中に入る候時よくへ  
迎へてしや飛ぶとくお退りけしや後信の赤馬を放生月毛と号を  
内々愛の強きるわいしやめと方内幸あく騎人も名譽の達者成  
助助入道とて種しやせしやも退死事成れは後信とて小味方の  
陣中おかけ入んとせしや後信の赤馬道鬼けりしやとて思ふや念  
なりや頻小馬をせしや飛りしや其間立るるやうしやいんせく候小持  
たふ陰を投打する小程をて移しひさうて後信の意する馬の尻  
ゆふ突當りしやこれ遠物なれは陰傷あり候も猶よれまき  
をけりしや大それしや厚川の方援助ふりしや其早死事烈風の

おとくをね後信お方成りしやいさ道鬼齒ををりしや敵軍を

白服人ぞとてりけれ あしきまふ

八幡の歌をうとく今世敵村下原村みまきせのまは成るくちる川  
みけるけしやけしや経違ゆるしや河を渡小見するしやけしや小見はるん

きのふしやいんまふしやいんまふしやけしやけしやけしやけしやけしや  
今とむしややとては我んわしやけしやけしやけしやけしやけしや

されふとありしやあふふのまふしやけしやけしやけしやけしやけしや  
所ありて今ときのまふしやけしやけしやけしやけしやけしやけしや  
うけりぬおと思ふくたふりしや小法師とてしや小法師とて



岩村田まで一里す驛内三所許お附して巻とかん候き  
敷立入は小法師明神あり是れ人あふしやけしやけしや

駒形明神社 駒形明神あり

周云むしやれ牧馬場なりしや中なる浅間山の麓なる石作なりしや



石の里の里ありては氏何某とて者元禄の年以駒の石あるを云ふ  
 見し半ひと云ふ云ふ其の石の煙より地より駒の石はなる  
 石地より地より云々これを感して年々元禄の年中は七日とて  
 なる其石の石

佐久郡相本村  
 新田



高き三尺四五寸許  
 後の方へ長く基不れなり石より真駒も同趣く  
 駒の石の内を式三分程する

今を社を建て駒形明神と崇め奉るなり  
 け駒成より下塚原と塚原と街道より小井あり経て堀む  
 と越え平塚原村より

相生松 平塚村あり

信濃 岩村田

小田井中で一里七町駅内の町五六町あり相対し  
 巷城あり其の敷を石若光寺へ別進道あり又小渚中  
 道二里あり又甲列池乃道像あり駒駅内森安徳殿

の領地く高人多し

恒古祠 小田井中より東へ約一里あり

かるい原 小田井中の馬場あり又馬場あり

信濃 小田井

過分まで一里十町駅内武町より多く農家ありて  
 旅舎あり宿舎あり東の出口に小乗師堂あり過分れ旅

家あり

け驛乃中井海河より小田井中より用事ありしをこれと云ふあり村

ありてより飯盛の嶽八つが敷ありて二四月の迄まで客あり是より  
 小田井中より飯盛の嶽八つが敷ありて二四月の迄まで客あり是より



當掛子七一里二河、有よく出女あり

宿の兩端よりあはれより越後より越中加賀越前と經て  
近江の物より京都へやうて山陰道より山陽迄十八里越後

の畧國川とて所中を過ぐ。至廿八里越後の高田へ三十里を過ぐ。  
 よう小玉乃成二里半ゆゑ小諸とて所あり牧野内膳に依り分く。  
 小諸田中と經て上田へゆ。所をも小玉道より過ぐ。上田へ八里半  
 ある筑摩川のほとり。松平信賀守侯の居城。越後より流の賣物  
 来る此國中經り魚塩りとも多し。やうく上田より所も上田乃  
 奥より又上田より八里半奥より松代とて所あり真田右衛門左衛門  
 居城。其より丹波橋とて所あり筑摩川をける。越川中橋より  
 筑摩川とて犀川との中小あり。河川中橋とて其より松田川あり。松  
 田より本郷義仲と年取の方へ越後城を布と合致あり。一町し

ナニカノセシ

壽永元年十月九日越後住人城四郎永用

相繼兄資元スケモトガ常國ヨシノホツス跡欲奉射源家仍今日シナノ木キ

曾<sup>ソウ</sup>冠<sup>クワン</sup>者<sup>シヤ</sup>義<sup>ギ</sup>仲<sup>チュウ</sup>引<sup>ヒキ</sup>率<sup>ソツ</sup>北<sup>ホク</sup>陸<sup>リク</sup>道<sup>ドウ</sup>軍<sup>クン</sup>士<sup>シ</sup>等<sup>トウ</sup>於<sup>オ</sup>信<sup>シン</sup>濃<sup>ノウ</sup>國<sup>クニ</sup>  
筑<sup>チク</sup>摩<sup>マ</sup>河<sup>カハ</sup>邊<sup>ヘン</sup>遂<sup>スイ</sup>合<sup>カウ</sup>戰<sup>セン</sup>及<sup>キ</sup>晚<sup>エン</sup>永<sup>エイ</sup>用<sup>ユウ</sup>敗<sup>バイ</sup>走<sup>ソウ</sup>云

小田井邊分の宿野井沢等  
候同士の幕政通等

電をねぬ法同社心乃清き一々の病を見て其を治め  
なりき

志を懐かるあはれはた事ものゆゑなり  
墨土の煙はるゝやふらん  
をいけ

病ふれば君は聖にたをり川の波をわぬほどと  
 石水清庵  
 和歌

いふて我意をいふ懸破法同れけりなりとも  
紀伊之

徳澤寺の蔵書に「糖」と「ら」のみやとあるね  
業平釣店

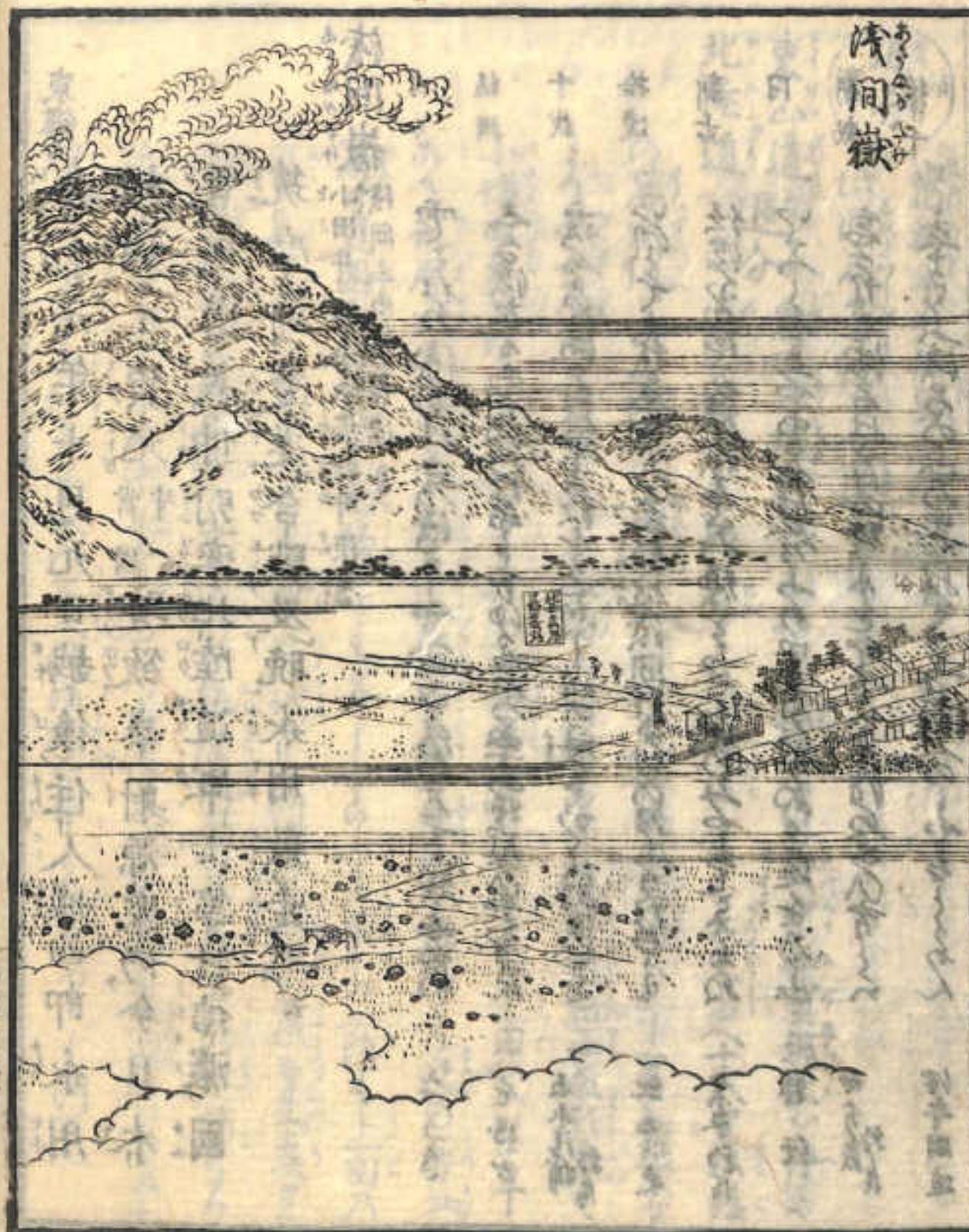
いづこ小まやあまむね多しありといふる遠き乃山

忘るはけの煙も水なり  
三浦のふりやう

まよひし海客の心寄すはるかに人のちかき人  
何事圖道



浅間嶽



好のこ

地ぬき

浅る年

あなう

まの煙

うね

浅

ま





新續古

懷素  
抄

走不

月苑心院

金瓶梅

春中は溪園のひふをさくくさる棚をききしを  
幾より越て尋人亭をたぬはの代夢はやと云  
ひしをいふふころは我身とをさる棚のさるを

孫懷光

溪園山記

寶藏真例

歩同然ふもやとくはなりとくは是をいひて方々の道に  
 手にもと見えられとて日ぬとあり字を自注筆に註釈とて  
 是れ目をもきしと筆必勢をいふと極とてあ非ふあやと  
 無くもかゝる種ありと筆上と真はうと乃新面と麻隠し  
 その非くわ憐く雪をふとあふすいふ勢もはくものひく  
 背面の非とふは圓<sup>ムラ</sup>木とふの志ま曳く向伏するあつとわ  
 まくとつ原ふけとて<sup>タリ</sup>志より葉より年言ふ焼くとい  
 岩移ふか人あうもくといふとあふふとあるとくつわの  
 形より更ほと市日乾<sup>ハ</sup>やとくは科戸のい作勢もた

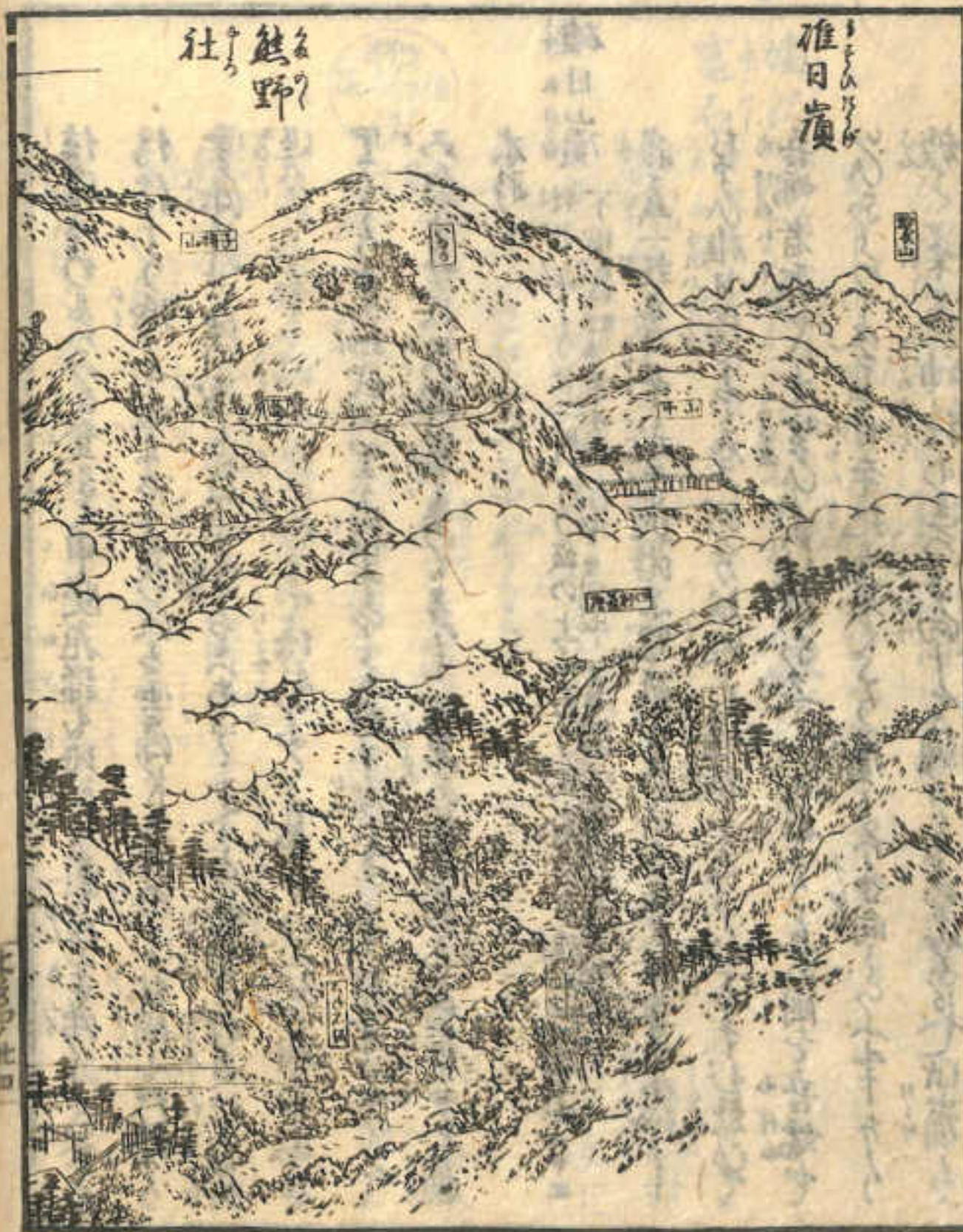
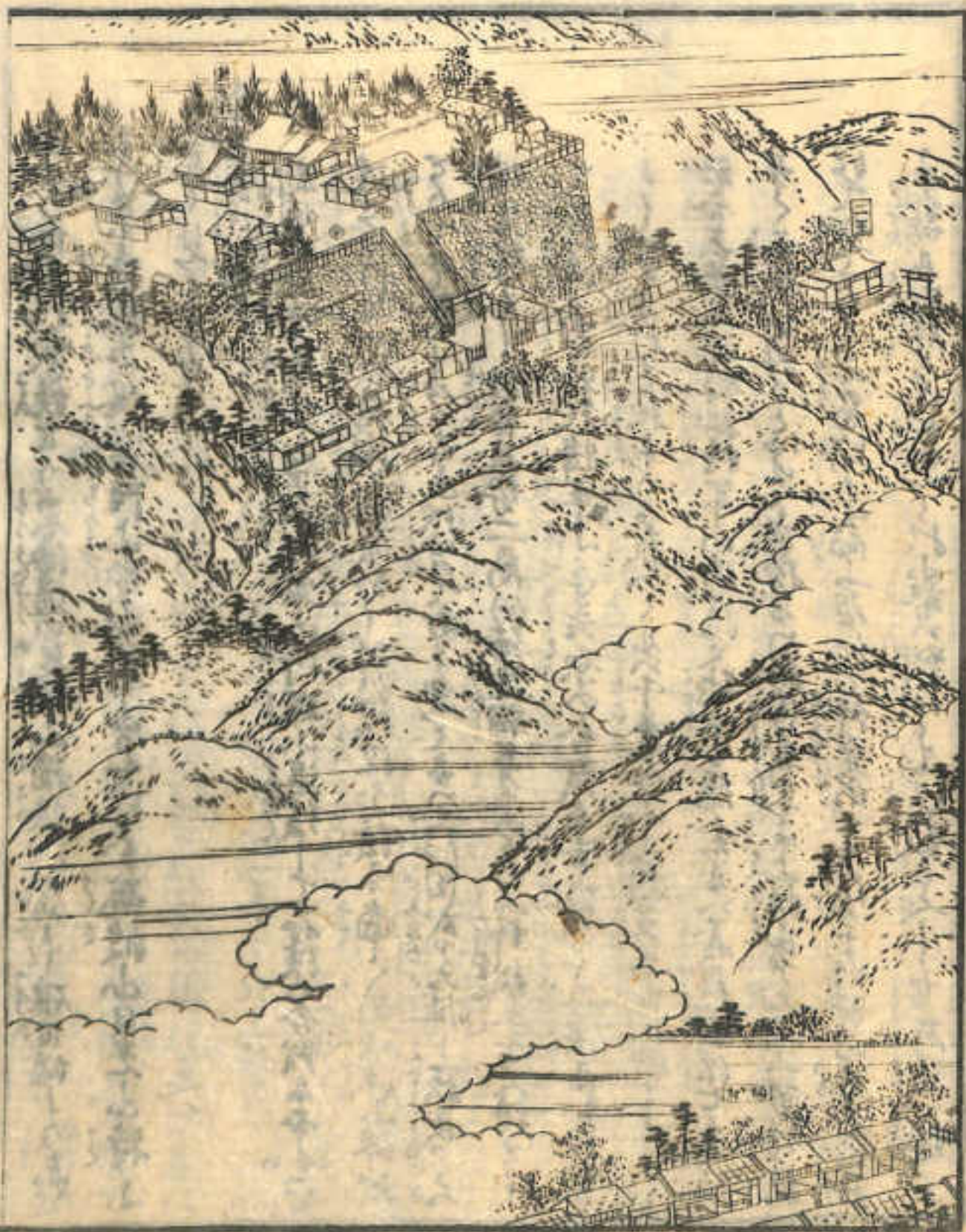












社 熊野

唯日嶺

水名四世四



西より坂東に入ふ境なり東海道の足柄山箱根山のやう碓日なる所と  
見まふ武蔵下総常陸上総のやうなゆふ荒波の日光の特別  
高く見えてなり

太平記笛吹許合歌云

新田武義守義宗と足利將軍の河運小退後して石浜の合戦も幸を  
達せしむる武義國と相ふり誠は信義を後も南と南信州の陣状  
とて世に傳へたる事なれども大に因武アを浦上叔民ア大  
浦上隆興と相合其勢二萬餘騎先朝第二の天上野親王を大將と  
て河運小おれ將軍小は石浜の合戦も幸なれども石浜におれ家  
より遠くを馳走りて北へ北へ千集ふふと相友なる大將と  
相合其勢八萬餘騎將軍の河運と馳走りて薩摩の義興義隆七千餘騎  
母と老幼を付々とすく武義も新田義宗は上叔民アを浦上萬餘騎  
にぞ相とるとはもろくへ向ふなりと評定ありなれども河運の芳もぬ  
また新田打勝るべからず北へ北へ散るべしと評定ありとて石浜一達ふ

本考四ノ世立

定て將軍内二月廿六日石原城をくむ。此府より召給へば甲斐守  
源氏武田隆興も同刑す。大痛ふ。息修理定武田上野守は甲斐前  
司成始として都合式に召給ふ。と馳参る。内廿七日將軍御儀傳へ押  
よせ。款の陣と見ゆ。小山根生茂川と云ふ小河流する所の南原陣小  
取で牽らぬ所、旗を打ち廻り、其白旗中軍機柵のを挽つた。  
の段うたてる旗ども其數滿ちたり。河川一帯は甚だ案內者あり。  
とて甲斐源氏三百餘騎来て押しこころ。朝岡武義守と歟。是も  
荒きの越後勢同三百餘騎多くおゑり。あつて守付たり。歟。不  
速に入道常宗院の甲斐源氏百餘騎討まじり。列を我く二處に  
千葉分守於宮中山佐竹勢におゑまり。七千と上校受て大痛  
陣へ押よせ。入をれく歟。信濃勢式百餘騎討まけ。是は  
害事も二百餘騎討ねく。損引小左友親と引ひける。兩陣合はせ  
追ひ下り。其日の午刻より西昇の終すまで。一を休む隙なく終る。



たりひききしてなり武小勢よりく大敵小頼小と鳥雲の陣小くあり  
 鳥雲の陣より先後小山とありたなり水城境より敵と平勢小見  
 知れ我勢の程を敵に見せしめて虎責狼率よりく討たれは  
 親之陣幸小鳥雲も南よりゆく我より利有よりくと武虎さ  
 表武者よりく毎夜度よりくけりて大勢よりくすれり同日夜親ひ  
 千夜よりくゆりてくも敵目小ありて夜の大勢よりく討回上校はゆふ  
 おまけて箇時頃へぞ引よりる下巻妻よりくさる  
 是武田大膳よりく大膳信と虎病よりて引籠りよりひりば代官よりて  
 板垣駿河守よりく大膳とゆり乗系よりく徳川尉誰より日向大和守小山田左  
 兵衛尉小宮山丹後守昌友遠見勝信小曾南郡小信列よりく荒田  
 下助也相本市よりく武尉を指割られ其勢を合七よりく人十月四日甲  
 府をよりく搦より搦より押留よりく三日の巳卯よりく小室通の退よりく  
 将井沢よりく越よりく箇時頃よりく馳せより上列方よりく先陣を上回又次郎

本巻の四十九

日本武義の確日廣  
 より辰巳の方よりなり  
 橋場をよりく吾等より  
 し雲よりく人の特より  
 金石のよりく後世より  
 秘しける





見田五郎左衛門松田重光なり既小三万二千餘人の軍勢を以て人將  
萬餘人と此方へお越後陣を破く備と云く作の彼方へ押付たり人將  
板垣信純今日の先鋒と信純は多く集りてとて弟佐治と佐治は向ふと信  
見上れば勢漸く三分一は破れ方より越えり後陣の勢と信付て合戦  
を始んと討別をせしめ多く人勢の大勢と越えり必死に志し打ち攻  
めせり二陣も破れり本陣と云く下へお越後陣より下へお官軍といふもの  
は先陣上回又次等々先鋒佐田丹波守は多く集りて去れりお官軍といふもの  
三科肥前守廣瀬は多く集りて一義本隊に入ふは破れり士車は多く  
押さへて突入し進みしつて破れり是と見く上回又次等々後回付  
すは破れりやして丹波守は多く集りてお官軍といふものと男は白  
旗を抱きしめしつて廣瀬は多く集りて生年十七歳と名を告ぐ丹波守  
は押さへしつて両馬を同小隊に多く集りてお官軍といふものと男は白  
旗を抱きしめしつて廣瀬は多く集りて生年十七歳と名を告ぐ丹波守  
は押さへしつて両馬を同小隊に多く集りてお官軍といふものと男は白  
旗を抱きしめしつて廣瀬は多く集りて生年十七歳と名を告ぐ丹波守

せんて退取巻廣瀬は多く集りて生年十七歳と名を告ぐ丹波守  
中へ取籠りて中へ五人突伏しり残る傷兵多く是非なく其場と  
敷走に上列勢は後陣と信し多く集りてお官軍といふものと男は白  
太本敵軍陣易しと旗旗四度踏みしつて丹波守も早計れぬと  
いふは多く集りてお官軍といふものと男は白旗を抱きしめしつて  
お官軍といふものと男は白旗を抱きしめしつて廣瀬は多く集りて  
上列勢の二陣は破れり人勢を多く集りてお官軍といふものと男は白  
の曲柄は多く集りて一義本隊に入ふは破れり士車は多く  
二義本隊は多く集りてお官軍といふものと男は白旗を抱きしめしつて  
馳入るは破れりお官軍といふものと男は白旗を抱きしめしつて  
られくお官軍といふものと男は白旗を抱きしめしつて廣瀬は多く  
風情半で敗士を恥しめ居りし三科肥前守生年十九歳と名を告ぐ  
お官軍といふものと男は白旗を抱きしめしつて廣瀬は多く集りて



切所より公の使より返りもあらず見奉るに相うくその如  
 迷ふ勝負して救ふれ有るなりとも殿の志度おはせといひ修め奉り  
 けり今公の侍より申すも互に勝負お合せく惜く戦ふと見る如  
 三科力定と踏み鉄壁と陣あり実勢は軍への内甲と突き馬  
 運より落しうる肥前もた右の角にさる事なり二陰三陰ふれ  
 奉勅て則首級控せられ松井田に移をえんといひ越え信く江奥の振  
 舞ふか是非返して討死をせよと究竟の者と馬前より連ひ備と唐  
 仍ふまゝ切所を越せ二で三は討人といふ公衆承日向相本若田氏  
 始てて朋勢とあり突くる中にも上段を及ぶ向倉赤き赤き首と  
 その已もく真引退く上校勢散々に討負く作を越え敗ると退信  
 かく討死信小秋の首級は年一千八百十九級武畧よりいふなり  
 大々勝其日の午刻よりして大將駿河守信形勝岡の法武を執りせ  
 其身亦凡小腰をうけて軍政と奉りける分時よりいふま將の如く



百合若大馬  
 射貫蔵

足張石

村山

小倉



熊野権現社  
雄略の町あり奉仕三本末多し  
石塔ありは宮なりおゝ一の方角二王堂あり

刻石坂いしざか  
 十八町いそ坂さか險難けんなん  
 うり

万葉  
朝思夕思の坂とて  
た妹を思ふ  
思ふまゝなり  
讀人等

飛トビトト行ユキ經ノリどノうウ一ヒト海ウミふフあアひヒ想ソウえエろロもモうウ  
もせ派

野井泥をまけりてわ板嶺のてしは所もく想ひあら後ふて  
 しかるあてちこすのぬ河を阻てゆと登てて越集田を  
 離まてくも所く小新路も知りひくちけつまの月を郷も降らせ  
 新をあへり道はれいあちこちまでも登りいぬくも同くは  
 一盡の酒は碑とて道小側まて泥のてく形くひ津坂知り大碓日味  
 小てりてちすの権現をぬり山中村より別石坂をわきて腰の筆尾  
 に緋の袖裏もあはれと藤餅を流すくち種より下り坂十八間も

本為四壯九

路はうゑをいふに坂本の張子の所

松井田<sup>まついで</sup>で二里<sup>ふたりに</sup>半<sup>はん</sup>宿<sup>しゆく</sup>立<sup>た</sup>所<sup>ところ</sup>許<sup>ゆる</sup>民<sup>たみ</sup>家<sup>け</sup>相<sup>あ</sup>対<sup>たい</sup>し<sup>て</sup>巷<sup>ぢやう</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>に

[illegible]

百合若足彌石  
 小山沃の道の傍  
 古書ふくむ世傳  
 のりひつり幸伝  
 北

但し日本武藝をあらわして、  
又花菱の百合の

大匠の古流ありて其力甚勇まふに  
いへば人日本武藝家をも下りて  
いへば人日本武藝家をも下りて

之れも世はくさるゝ  
 子百合大匠九郎  
 天竺の僧  
 左大徳

公先の...  
...を日本武蔵と云ふ時代異なり  
...右の光石磯狩り  
...射し去炭の藪み

邊  
穴<sup>あな</sup>  
り<sup>り</sup>  
の<sup>の</sup>  
下<sup>した</sup>  
に<sup>に</sup>  
連<sup>つらなり</sup>  
ふ<sup>ふ</sup>  
る<sup>る</sup>  
多<sup>おほく</sup>  
針<sup>はり</sup>  
の<sup>の</sup>  
う<sup>う</sup>  
ち<sup>ち</sup>  
なる<sup>なる</sup>  
を<sup>を</sup>  
あり

卷五

安中より一里二十所は歌を松枝にもふ

松井園

八岐文の御一語霜弁ふあり是より妙義山と赴く

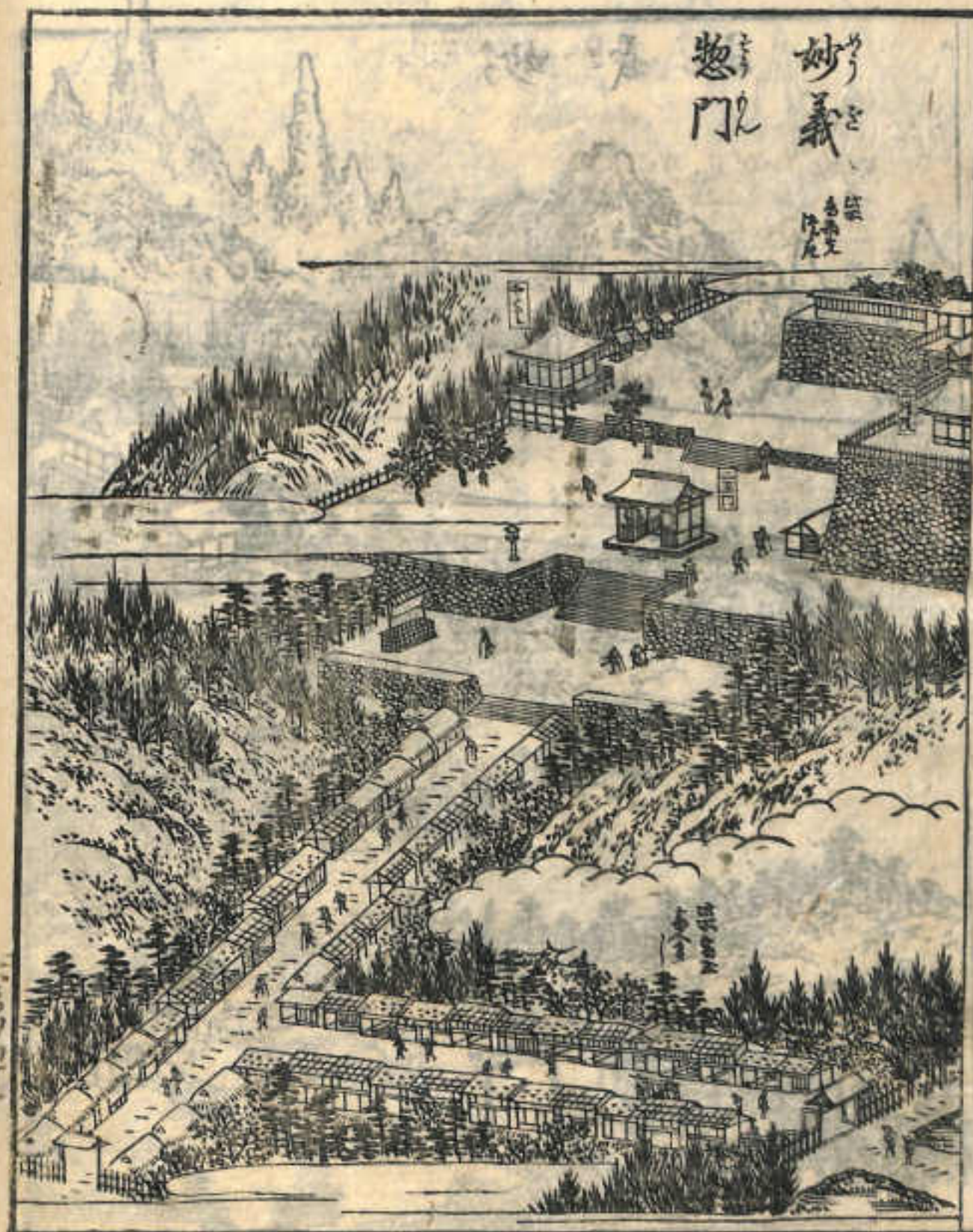




本巻四十一



妙義惣門



白雲山高頭院

俗小妙義山と号し松井田より入る又横川

奉社妙義大権現

社殿大権現

波古曾神社

山比主神

天神宮

太神宮

末社

八幡宮

山王

北三夜

神樂殿

繪馬舎

護摩堂

清香水あり

辨財天社

飯綱宮

観世音

欽喜天

飯綱不動

巖窟

中門

石階百六十五段

廻廊

石階

石階百段

御湯釜

隨身門

石階

石階百段

鳥居

辨財天社

稲荷社

大黒天

人丸社

花養神

藥師堂

石階

奉坊

橋

漢川

石階

神馬舎

惣門

惣門

惣門

惣門

そ神高山と波古曾神社姓右よりの地多神より延徳帝の







野 板鼻

高寄中で一里三十町は筑民居三に町をうろ相對して

貫糸神社 板鼻の南のききふあり一の宮と云ふ

八幡宮 八幡村ありありハ幡を所載敷敷の安倍貞佐佐伯成

神樂殿中門 出神あり

本社中央應神天皇

東神功皇后

西仲哀天皇 筑あふふ

本地堂 安れ

惣門 二天と

末社 山王

其外多し

若宮八幡宮

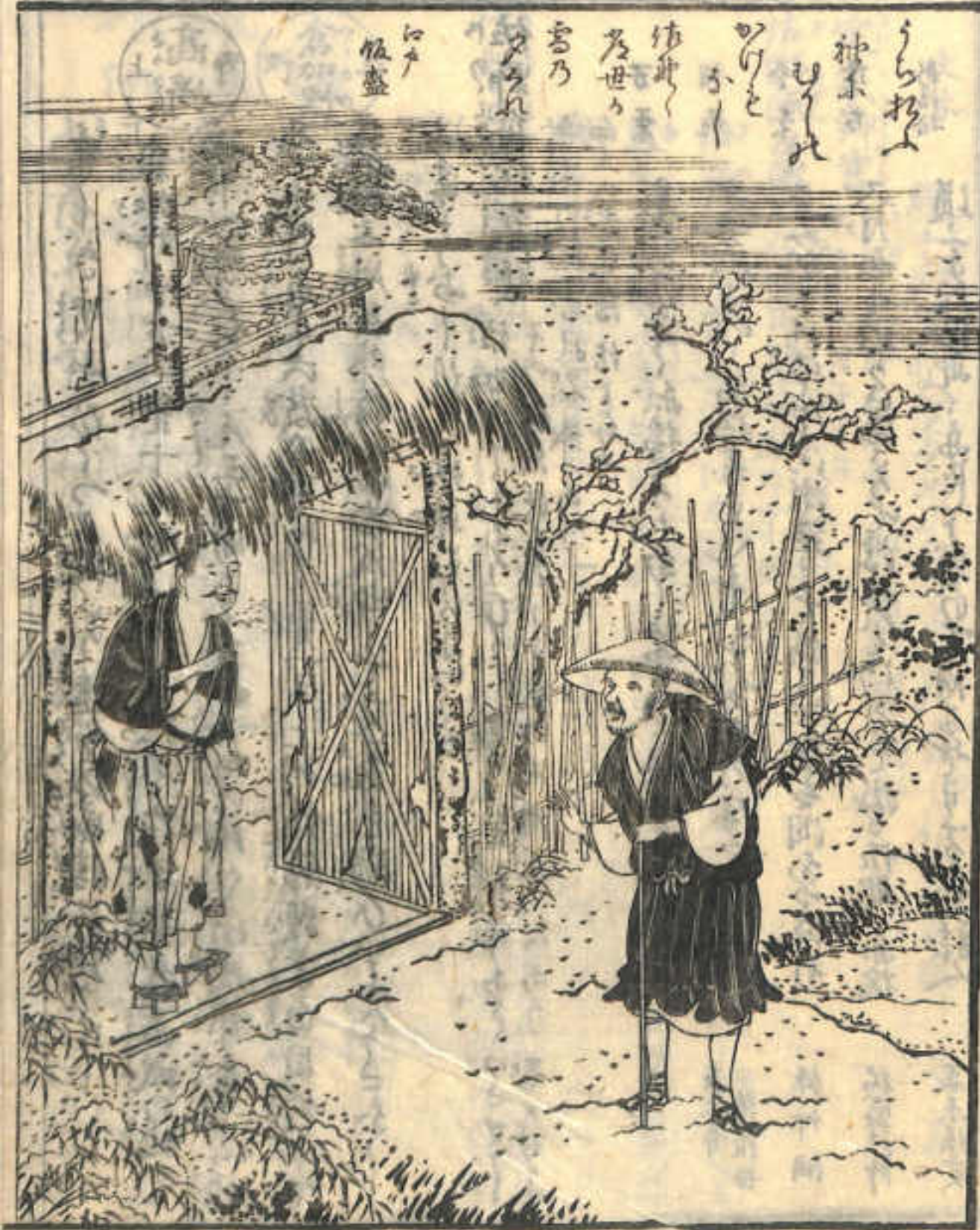
上豊岡ありハ幡を所載敷敷の安倍貞佐佐伯成

鳥川

河原あり

板鼻を過くハ幡む 辰塚村より辰同権現の宮あり豊田村を  
 経て見えては高寄川よりなる道ふ向ふ成ては日と原野  
 此等の處よりゆく樹々の影も雲と峯れね風ふそく山の

しらね  
 神木  
 ひろみ  
 坊此  
 名世り  
 雲乃  
 夕られ  
 板盛

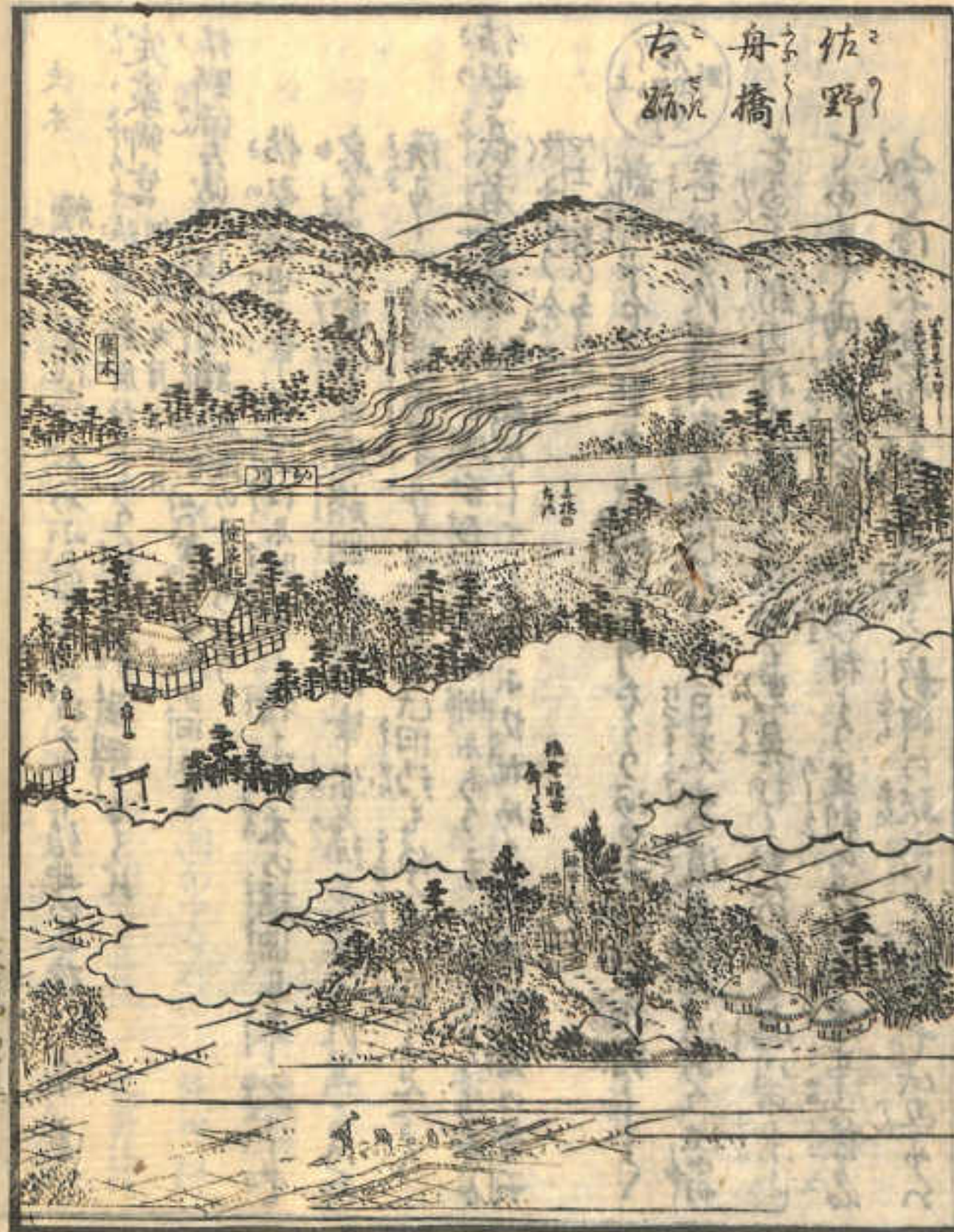






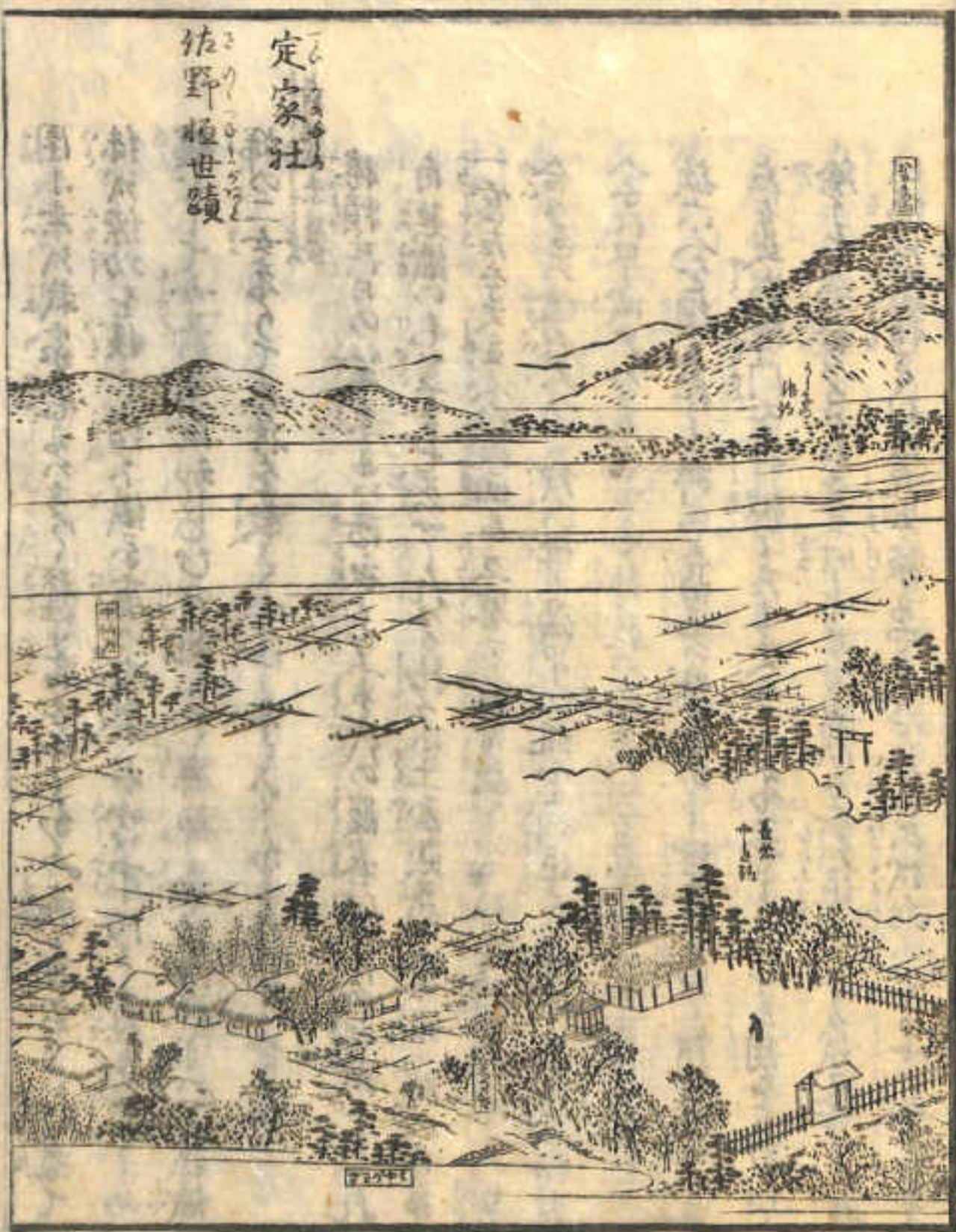


佐野 舟橋 右



木芳四十五

定家社 佐野 恒世蹟









新町

幸座中二里南駅六七町あり

氏家相對して巷をかん

金鑽明神祠 御祭九月廿九日

祭神素盞烏尊 其外社あり 幸座堂不執事

其外社あり 幸座堂不執事 御祭九月廿九日

上野 武義國場

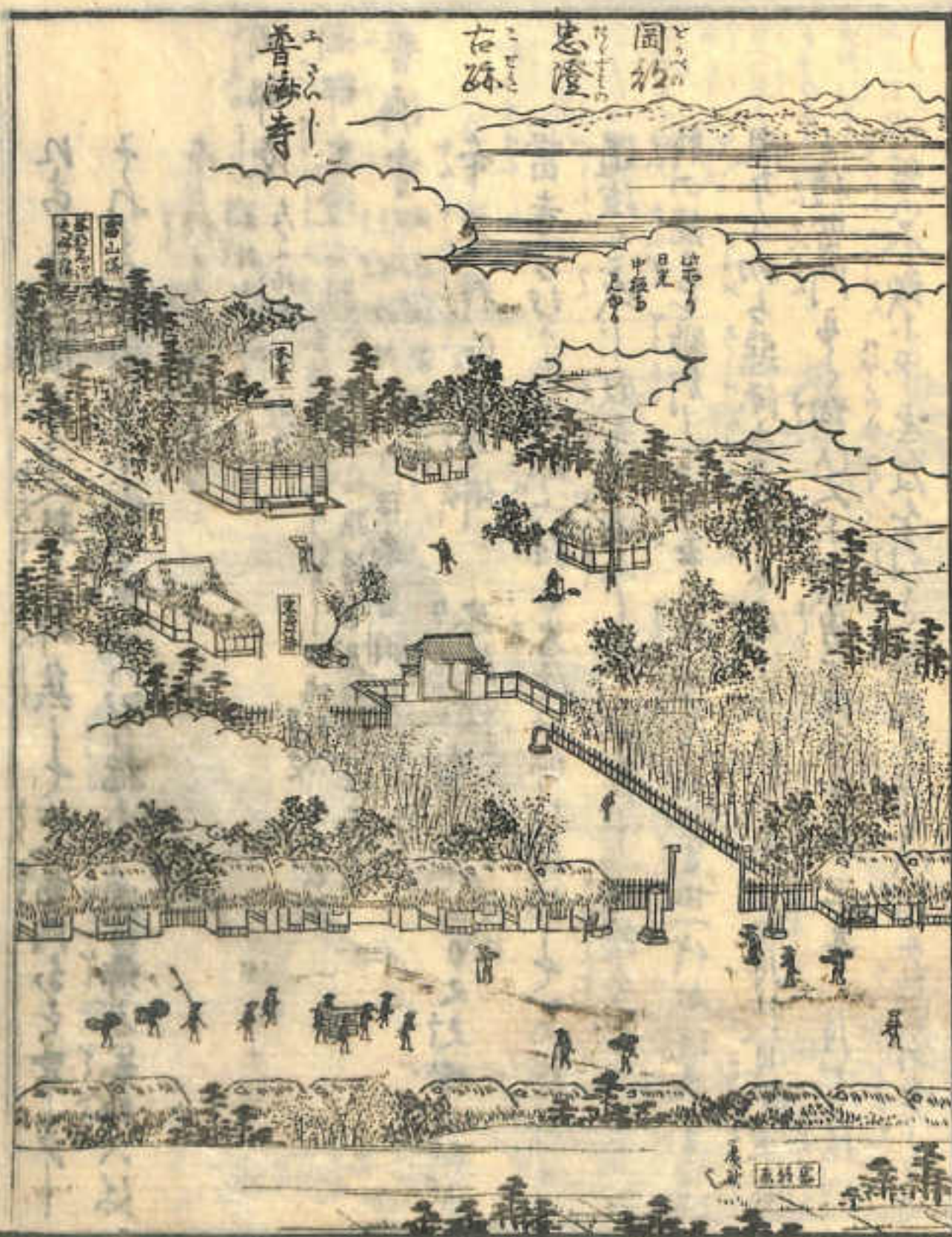
け張坂より四ノ門川をわたりかへも宿かへ度ひし石神よりわ  
左の方る赤木山見ゆふ殿士峯山似たりけ新立場之晩念寺  
村伝るく小橋村よりすけ所よりゆきこの道あり左の森の中に  
あふき金鑽の原あり

武 木庄

源管中二里廿九丁け張氏居三田町けり相對して  
巷伝るく祇堂の神本あり六月廿七日あり  
南駅を過り侍尔堂村より上野武列國界の標より建ふ殿ふき

普濟寺

忠澄 國光 右孫





以て大市あり人衆多し群集して交易ありを幸多し  
 それより堀田むく小川常より橋あり岡の郷と云はれ六  
 寺あり

岡部原 岡部村あり  
 岡部忠澄古跡 今も門跡あり  
 晋濟寺 岡部村あり

本尊釋迦二尊佛 忠澄墳 堂内あり又村の  
 當寺あり 岡部六郎を忠澄は郷に鎮地しての禪師  
 道徳を成し殿閣を造る幸多し十一面觀音あり  
 軒の觀音を雕刻して安置し村に奉安之皇世一代教達天皇の後  
 亂たり初に惡縁を裁平らふ属し平治元年十二月廿八日平重盛  
 と待賢門より觀ひ大武勇と稱ひ喜永三年二月七日擧列  
 一谷の合戦小平忠茂を討つ首級を得るは故郷の榮とて

蓮生法師  
 家門に入り  
 方へはとも  
 東へ下るも  
 虎馬は金  
 易の道  
 時人





忠度の米比五色と忠澄本賜の忠澄武列秩父郡我井村に岩碑を  
穿ちて石室を宮と自像を石壁に彫り其傍に孫院と建てる  
忠澄菴と號し又武列秩父郡岡部小位にて岡部を名とし  
墳墓に築いたる忠澄靈神と作ると其外良徒の古墳に  
而も宗祇法師行御のと見え此塚にむかひて信濃のわが宗祇

かたを向ふ岩に北の古堀小好の迹あり此松風を吹 宗祇法師

武  
深谷

深谷中より武里二十町は深谷六七町并氏家相親し

親音堂

深谷よりあり一本の柳ありと云  
兼園坊の碑あり其銘本日

我佛は身入る風持たてし宗風持ふ  
身とけりと佛法をさうと云

此の寺は初めと云無りやうの云

はとまうくや柳を志骨と非とも云々

兼五  
祖風

武  
熊谷

は深谷のゆけは大本の松むきまう道の幅も廣うて其の  
は府本辺をを東方より新部村を立場より築石あり富  
柳ををく後抗新岡新島村あり植木むかひて市原む  
より熊谷の深谷より

鳩巢中より四里八町は深谷二に町氏家相對して菴とあるは

左右も町あり至るは深谷の所より秩父山へ三里す

は熊谷富山より富山重忠の旧趾の城のわが江戸より富山

十六里熊谷より幸多二里半南の方よりを永井へは二里す

ありこれより深谷別當実盛ををみし所よりを里半ありは宿

に赤城の所のありあり

蓮生山熊谷寺

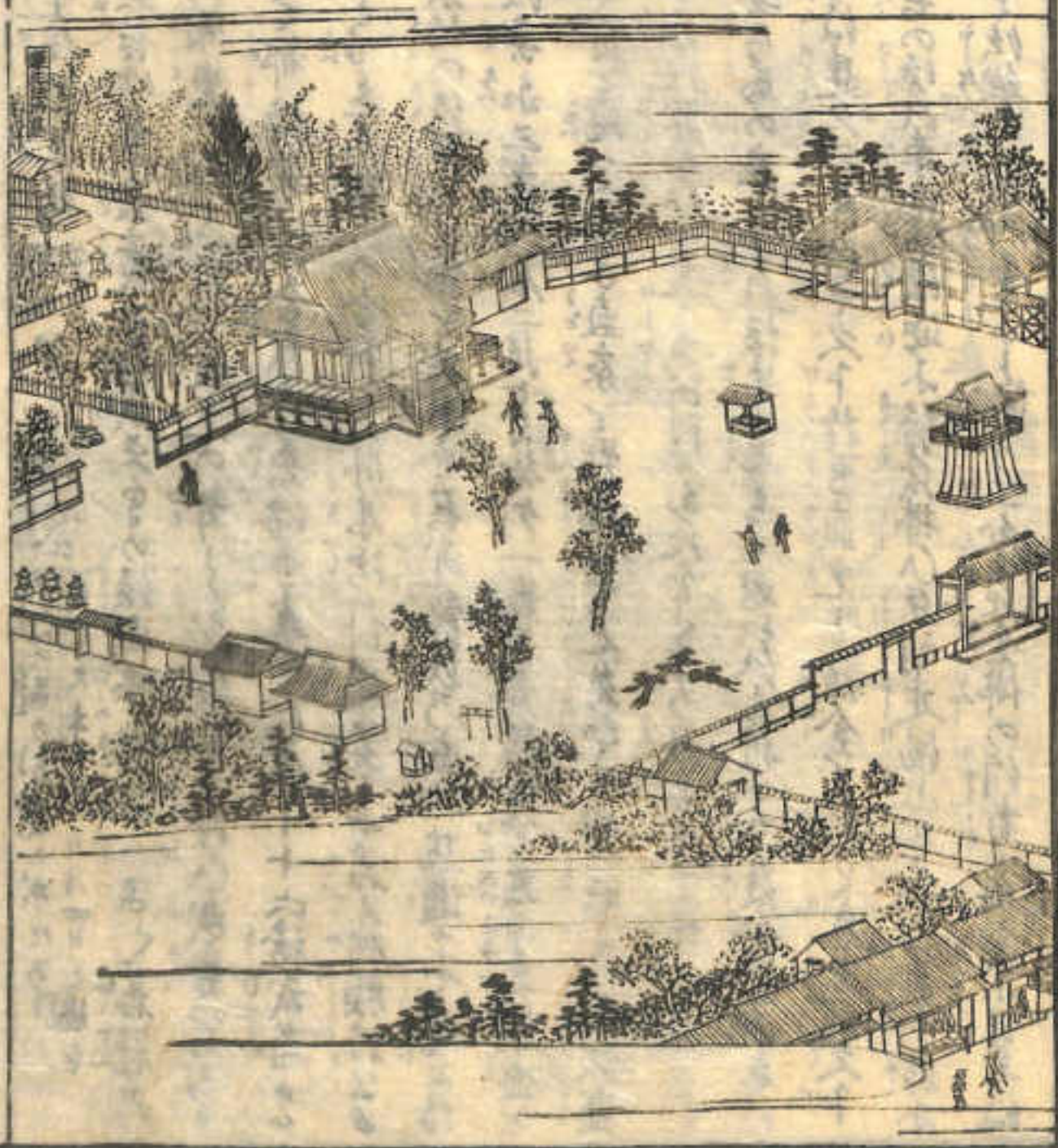
熊谷の南中にあり佛を奉

奉尊阿彌陀如來持念佛く西東門外陀佛の其一なり蓮生

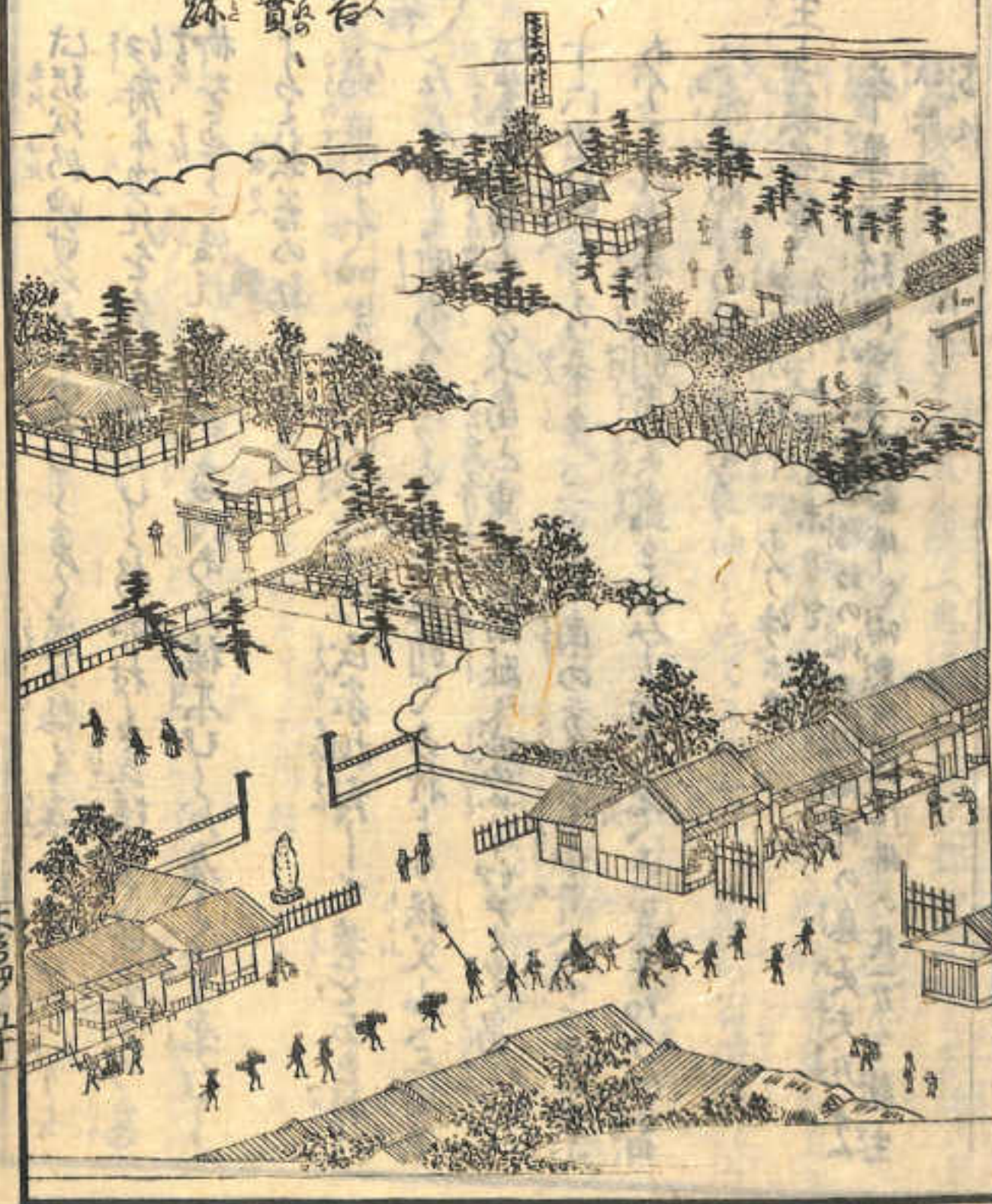
法即持



寺 熊谷

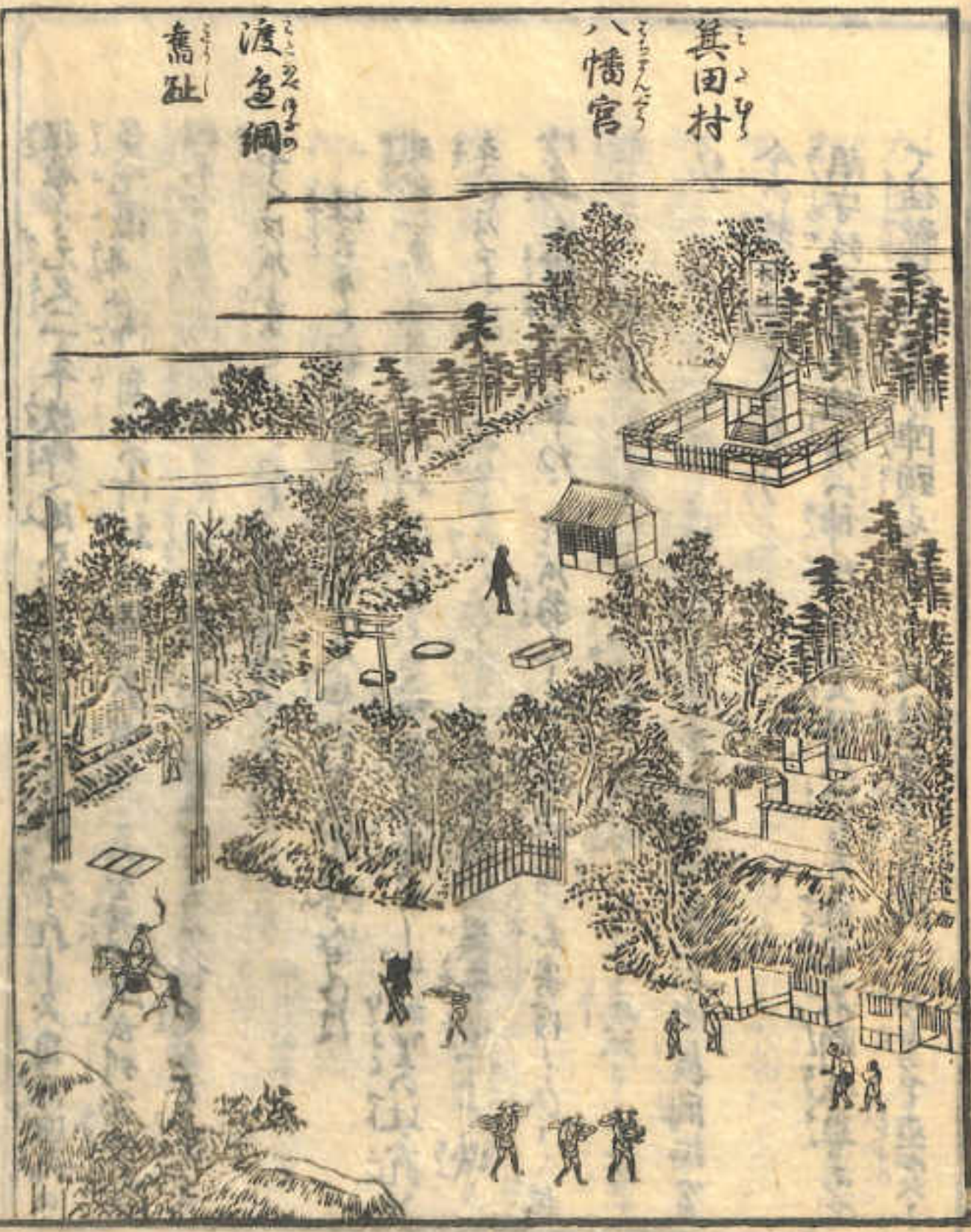


熊谷 直實 古跡





蓮生佐師本條  
 日臺  
 邦德若治希直實と桓武天皇の後周平盛方のふく若冠乃  
 とれ周東に赴こ之下直光の聲とる成長は序の武勇つらる  
 うて都待賢門の合戦より急候を我半に属一十六騎武者を  
 随一とほま不搖山の合戦より本居の思案とて右大將頼朝公を  
 若小嶋の紋付する幕と若外を其外勲功の威状世通して賜る  
 其後永承三年 甲辰二月七日檢例一若乃合戦より友を更敷盛と  
 討く者賜る若子直家と戦場より見失ひ一討の想より人教盛  
 つの父母此族といふ若子若のけつをより且る其若托を属ひ  
 其身弓馬の教より後生の思とも思ひに若より後公のい思に  
 その後建久二年の冬久下指若直光と澤金より若く武花園久下  
 健若の境に赤福の後通ふ若若排ひ豆列走湯ふより入若年若ふ  
 登り佐然上人の所若子と若く二公より金佛の行者と若成小若若





禮を元久二年故郷へ還るに上る願より久自画迎候の  
曼陀羅 并 淨自他の所お願賜ふる蓮生なるを及文武列へ下る  
時不肖の方の行者とて仮初めと爲成候事せうられ馬車と運つ  
まゝくは成臺せうるを蓮生法昨のみに

ほふと別の時を沙汰と人あひひて候事なり

建永二年九月四日午刻付中よりき佛勅があらうて村里の辻に  
まゝなる果て其日西人よりやま音楽聞て異音下て眠  
かゝく候し一畢ぬに候人として遠近の老若衆信ひて痛  
麻のうゝ紫雲へ多庵の上より止る半一時多り候て西に  
これしに生生の靈瑞く候也又正年中情隨意上人中具同起有  
今の慈音寺とあり  
禪守弥三左衛門稲荷八神伴弘法大師此より直定不斷法尊あり  
て猛敵討魔け陣頭より一討慈音弥三左衛門と名を重宝小

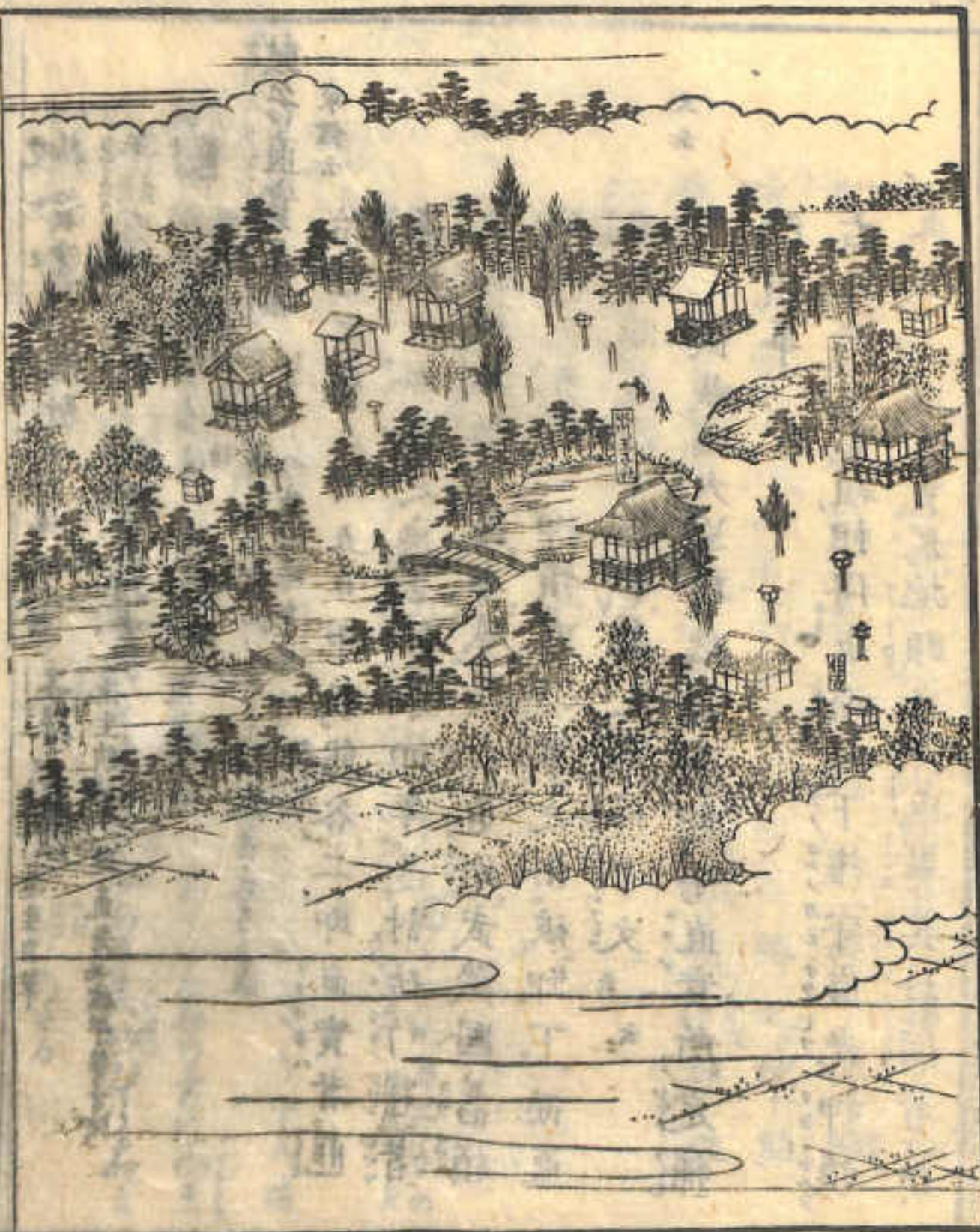
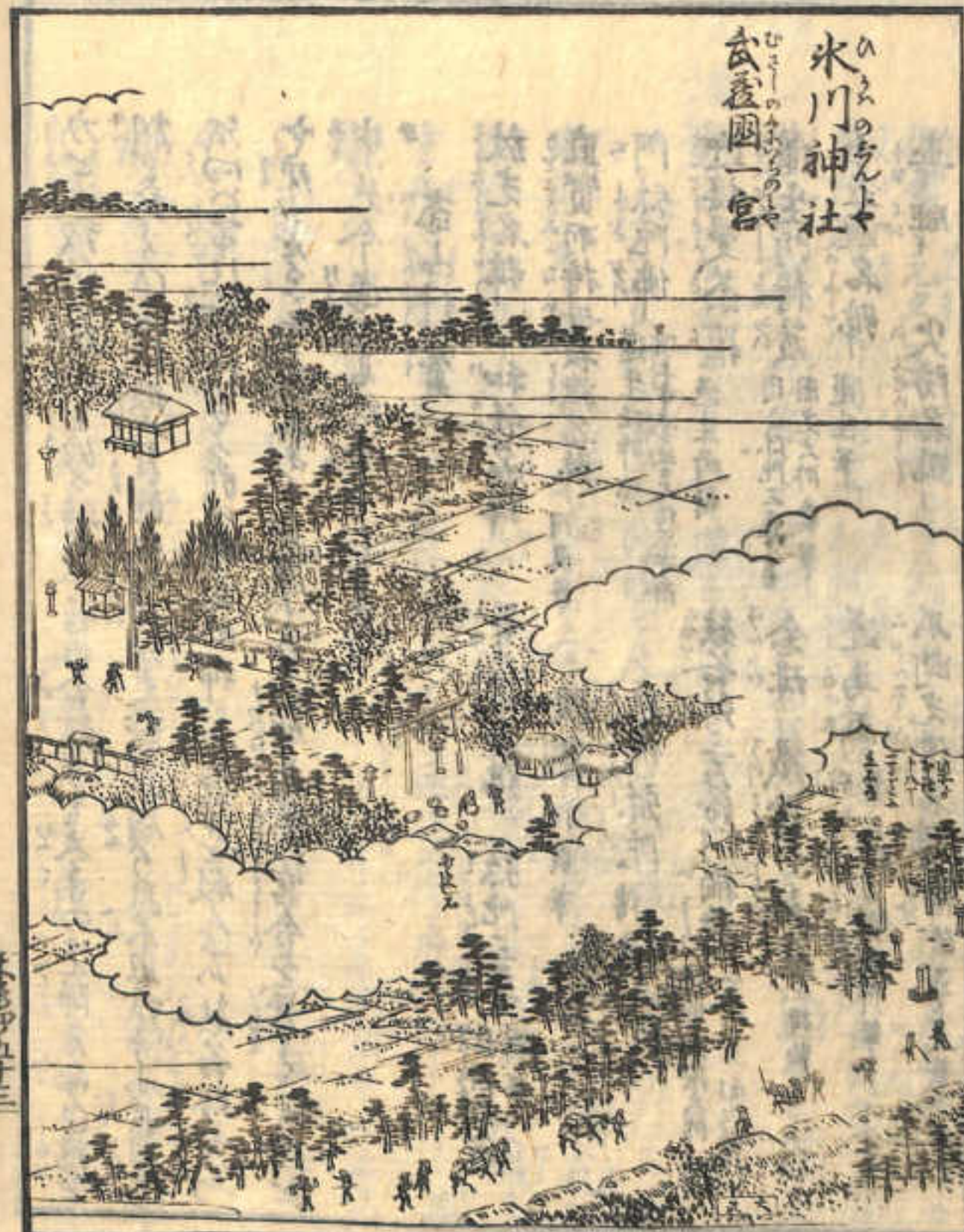
力と候我ひ小勝利と候特小一首の合戦も大手の先陣より候  
利よりひに彼人付越ひ加勢候とてけ候し凡不思議さふ其姓名  
弘同に常に信むる所の稲荷神に多難を救ふに慈音弥三左  
を現とるこそ忽其あを隠しぬ即其様に宮舎を築く候と  
崇光今南山に法守とも

南山什寶

- |           |         |           |         |       |
|-----------|---------|-----------|---------|-------|
| 放光名號      | 和歌名號    | 斧替名號      | 弥陀三尊    | 各圖光大師 |
| 直寶所持母衣旗名號 | 日真筆     | 理書        | 日真筆     |       |
| 阿彌陀佛      | 蓮生法昨他   | 裸形弥陀      | 傳來      |       |
| 迎接曼荼羅     | 蓮生所持    | 慈音弥三左衛門稲荷 | 神伴弘法大師他 |       |
| 蓮生所持笈     | 肉三弥陀三尊書 | 念珠        | 鐵弁      | 証     |
| 十五通名號     | 蓮生筆     | 蓮馬画       | 狩野清信筆   |       |
| 壽牌        | 火防名號    | 不斷光佛名號    | 楠隨意上人筆  |       |



ひまのえんや  
氷川神社  
ひまのえんや  
武蔵國一宮





御製宸 殊數 子孫に置状 進生自筆

平經盛神 訓國集拔書 進生所持 進氣考光緒年等書法

幕 騎鞍 進生所持

熊谷直實居城 戸田八間村より東行寺より人經寺あり云

東鑑云

治承六年六月五日甲辰熊谷二郎直實者。匪  
勵朝夕恪勤之忠去治承四年追討佐竹冠者  
之時殊施勲功依令感其武勇給武藏國舊領  
等停止直光之押領可領掌之由被仰下而直  
實此間在國今日令參上賜件下文云  
下 武藏國大里郡熊谷次郎平直實所定補  
所領事  
右件所且先祖相傳也而久下推守直光押領  
事停止以直實爲地頭之職成畢其故何者佐

又云

汰毛四郎常陸國奥郡花園山楯箒自鎌倉令  
責御時其日御合戰直實勝萬人前懸一陣懸  
壞一人當千顯高名其勸賞件熊谷郷之地頭  
職成畢子々孫々永代不可有他妨故下百姓  
等且承知敢不可違失

治承六年五月卅日

久下

久下次平直光が位所なり  
けり原上王のありけり云々土に於て人々と通ひたるあり土にの  
トハムか所なり云々川見ゆり上なるを云々其の  
ありては其の職の

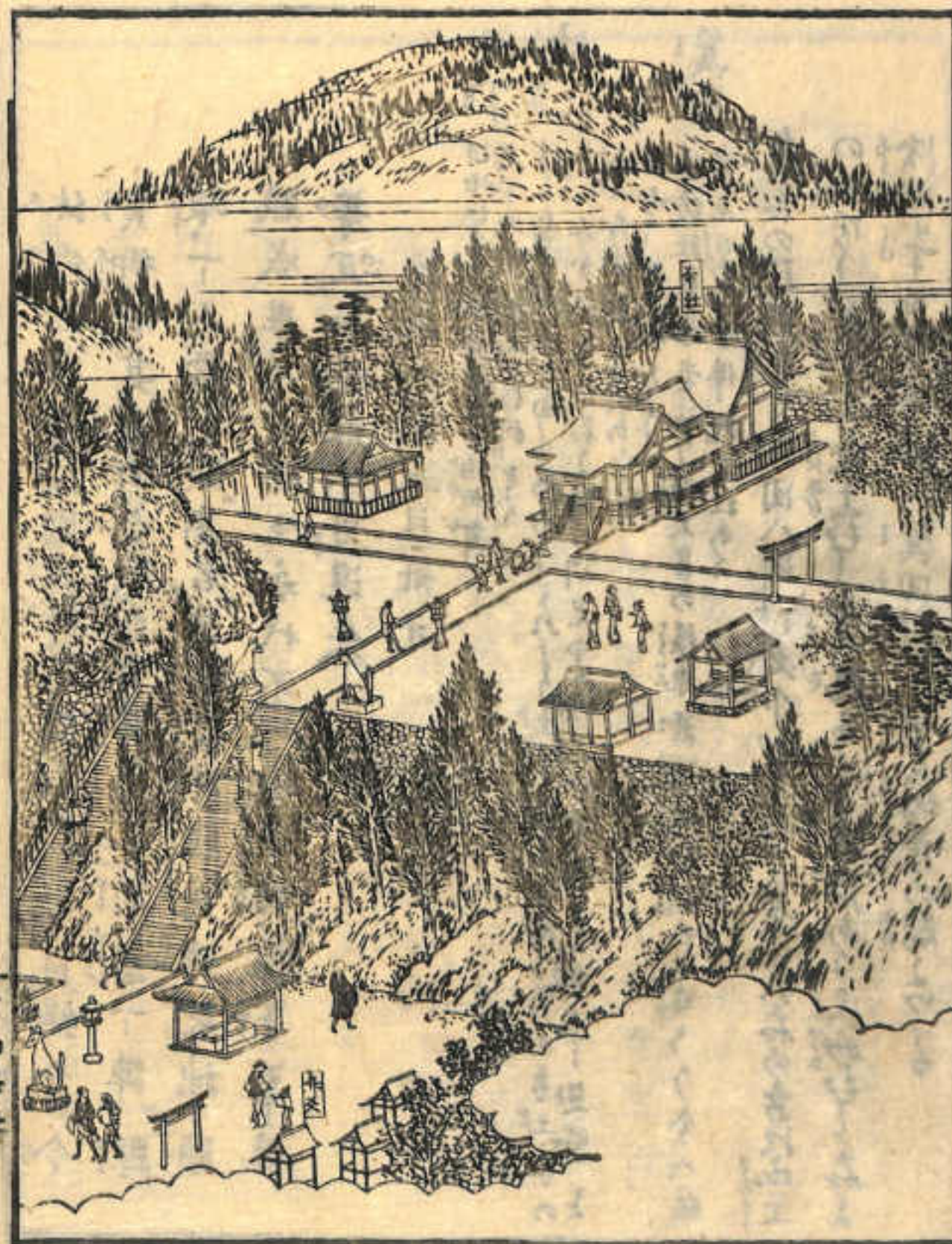
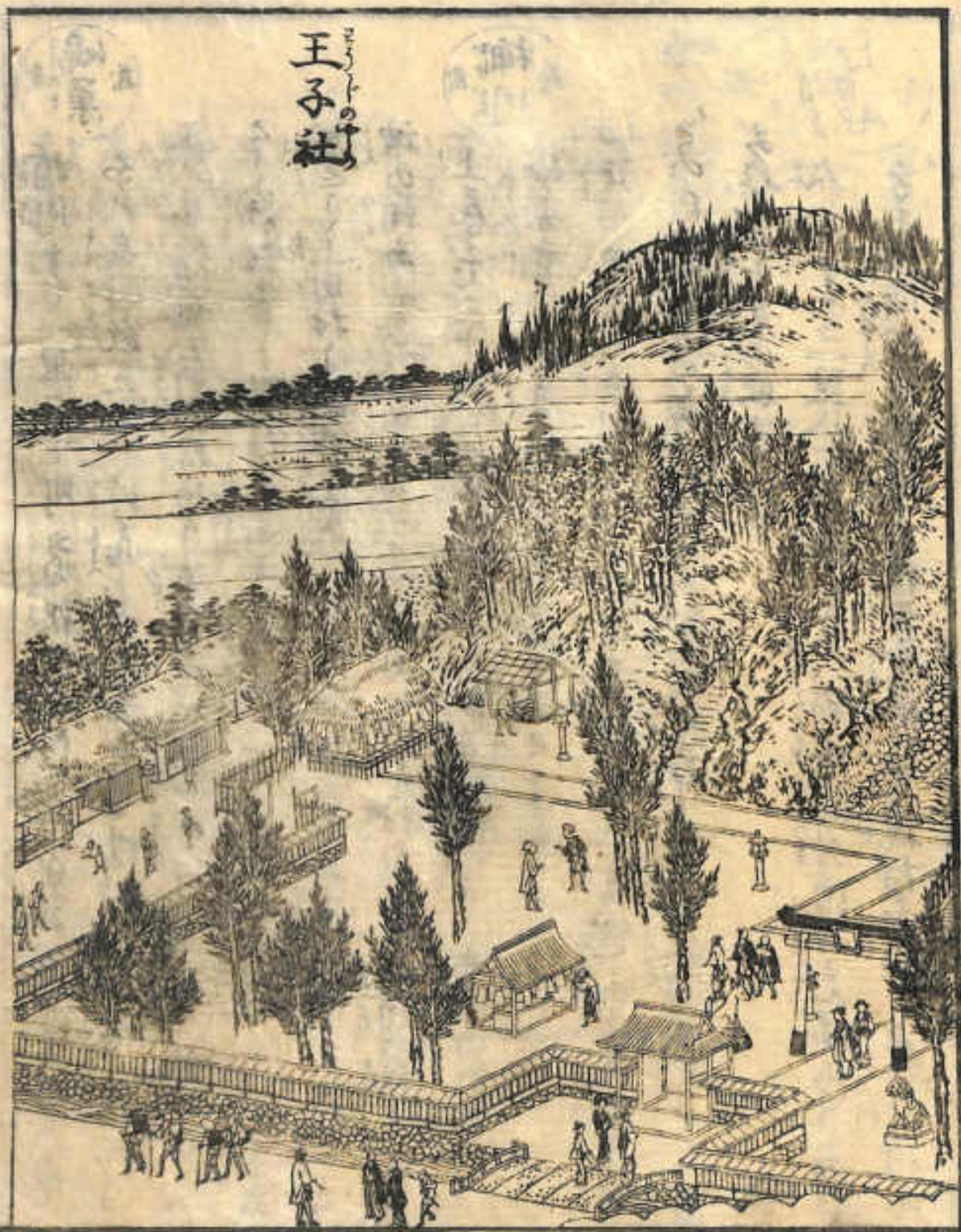
箕田

乃あり一里あり  
御傍社にありて大里の後継者熊田原吉綱の古なり今八幡  
宮なる念伴院にあり

熊谷の狀云々戸田八間村久下むらざり云々右の方には山王  
の祠あり云々上むらざり云々  
清同筆見たり中井村箕田村を云々其の  
云々



王子社





武鳴  
鳴單

武上  
上尾

武柳  
柳川

桶川より一里二十町南に三河民家相對して菴を  
 あり其の散在して住居する宿も葛城の神の御所なり  
 又大木の杉林大竹の林なりたの方に鉾林あり日光山の通宿又  
 三勝願寺といふ寺あり十八檀林の一寺あり東に三新堂  
 あり上尾村に雲母あり又清田宮といふえ徳果の宿あり又  
 神の御所といふ門寺ありとて新田やれは村を過て桶川の驛より  
 上尾まで三十町南に三河民家相對して菴を  
 あり金寺といふ寺あり又岩付の道ありあり  
 け歌城といふ所を村南にけれたる宿村あり雷電といふ林あり  
 この日は雷電の宿ありけれたる宿村あり雷電といふ林あり  
 あり上尾の驛より  
 大宮まで二里八町は驛より川越道岩付道日光道ありたの  
 方小沢間細い道ありけれたる宿村あり賀茂村あり

不考四辛

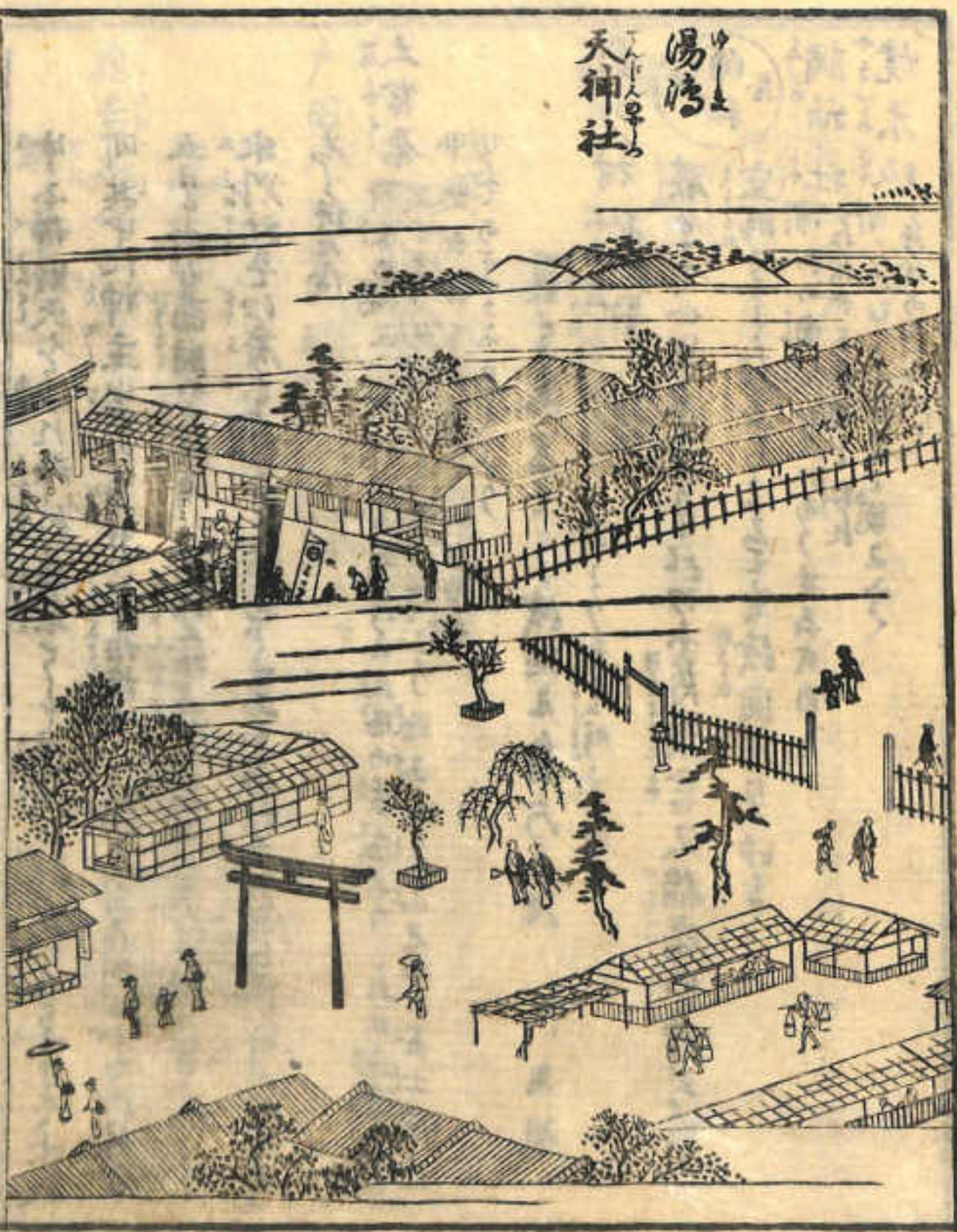
武大  
大宮

水川

賀茂祠あり音賀村の草村土多町にあり大宮の驛より  
 浦和まで一里十町宿の入り  
 東光寺といふ禪刹あり  
 水川神社 大宮の驛より延喜式云定都郡水川神社名神大月次  
 素神 素盞烏尊 以所の生土神  
 女群社 本社の左あり  
 五山社 大宮の驛より中山社 麓山社 正勝山  
 金鑽社 手摩乳 足摩乳の令  
 水川王子社 神池の傍あり  
 末社 住吉社 布留社 神明宮  
 神樂殿 池の東あり 幸地堂 池の西あり  
 不動堂 日所あり  
 吏當社 南國の一之宮あり社頭廣く神祇の池あり及橋あり



湯島  
天神社





中ノ辨財天を安んず神無き處にて並樹の松原一帯を以て十八  
町其中に神主岩井南井等居恒一社領三百石例祭を六月十  
五日より十箇國の大社よりて詣人臨時を繰りたる事あり  
氷川社を以て府をふまぐりてともみかゝる社を勧修の神神なりとて  
あつたる所

大宮原 野原の圃三十町あり中程より越後の桑原ありこれ松本國見  
甲斐武蔵下野形勢上列伊香保  
なりてあさかりふ見くより

夏も嘉安士り減回小鼻乃され

馬明

針久村 赤土合村ありは所よりを野原なる所とて

浦和

蕨中の一里半ひがし北は月讀宮又楠原の所なり  
空勝なると云ふところをも併同ふ見ゆ

調神社 浦和の南端にあり是を式内と  
焼米坂 所より北に三里あり是を式内と  
焼米坂 所より北に三里あり是を式内と

中ノ米や麻きく人小多

半成

浦和の米や麻きく人小多  
所より北に三里あり是を式内と

板橋 二里八町は驛民居六七町あり旅り

蕨

戸田川 二十四町あり

名を因むはひさしね里女村

秀曉

け驛をすはる元は此の所より戸田村より川端  
子安の驛迄は所より道あり

戸田川 所より北に三里あり是を式内と

此河をさく志村より所より小川に坂あり所より小川に坂あり

又地蔵坂をさく志村より所より小川に坂あり所より小川に坂あり

菰吉菰荷の所より所より又小坂あり是を式内と

驛より







武板橋

江戸日幸橋下で二里許に中仙道の東橋ありて四十町許あり  
所々小なる懸店茶屋あり紅粉を懸て花簪ありけりぬく  
美艷をかける格子のうらゆけり旅客もあそび先とあれきこ  
狐と真なるも多し

類聚

思ひのこもやをせられぬむ川上は流を玉章

頼政

平塚神社

板橋の隅の方平塚ふみあり  
別当安樂院附宮寺と号し

桑神

八幡を即義家實成公即義郷公羅三郎義光の三靈を  
祭つて三社と云ふ

鏡塚

幸社の邊ふみあり義家の鏡を  
祀るに云ふ

ひら川城宮と云ふ板橋ありて  
ひら川城宮と云ふ板橋ありて  
ひら川城宮と云ふ板橋ありて  
ひら川城宮と云ふ板橋ありて  
ひら川城宮と云ふ板橋ありて  
ひら川城宮と云ふ板橋ありて  
ひら川城宮と云ふ板橋ありて  
ひら川城宮と云ふ板橋ありて  
ひら川城宮と云ふ板橋ありて  
ひら川城宮と云ふ板橋ありて

王子社

王子村ふみあり別當と  
東光院金輪寺と云ふ

祭神

熊野三所神

本島六十

稲荷社

日村ふみあり  
金輪寺の支社なり

飛鳥山

珠生の頃と云ふと見く雲と散る花と様も神もえさるる  
句ひふまれば夜めだけに家路はたふくもまらね

句ひふまれば夜めだけに家路はたふくもまらね

壺風花鏡

風をたふ動ぬ雲と見ゆふ花の香るるふの盛と

富士権現

駿下ふみあり別當と  
幸那羅院兼宗所と云ふ

神明社

別當北山太泉院

文治五年源頼朝公の奉創く其後荒廢し村細のときと  
安永年中源氏の族再興し

田畑八幡宮

別當白龍山東覺寺

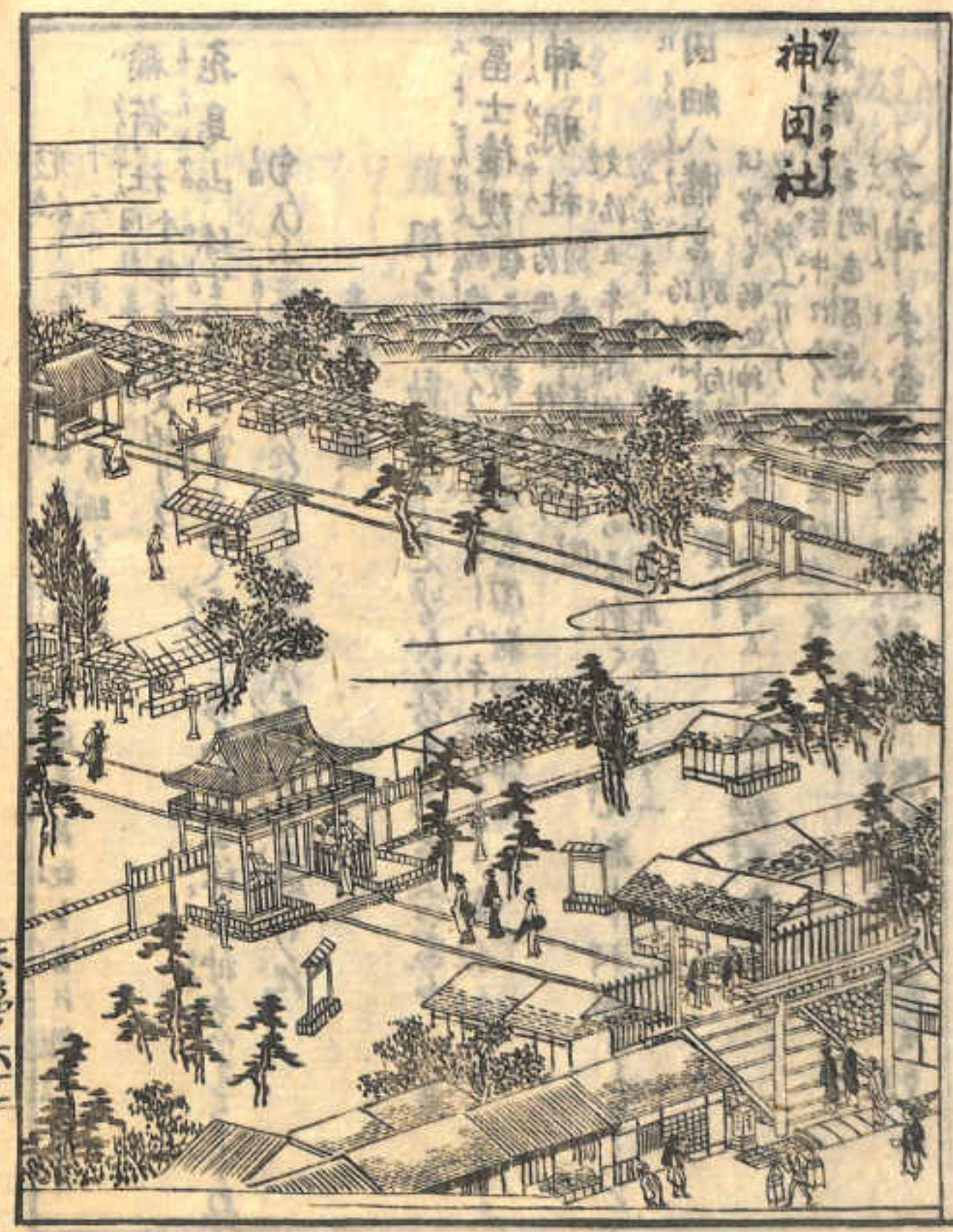
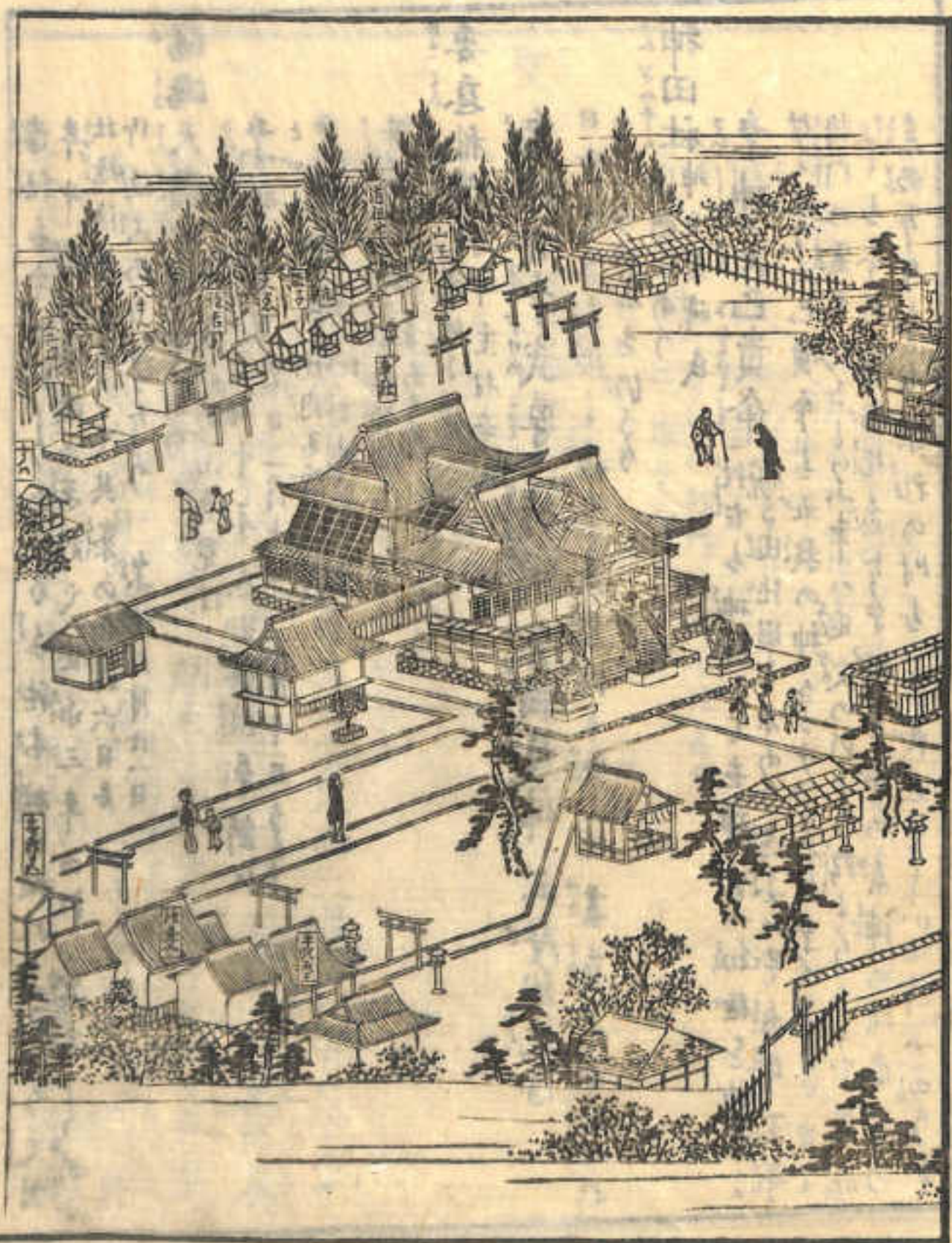
は宮も駒込神明宮と同時頼朝の御時と

根津社

岩中れあり神主伊吹氏

素神素盞尊大己貴命蛭子命三所祭事あり



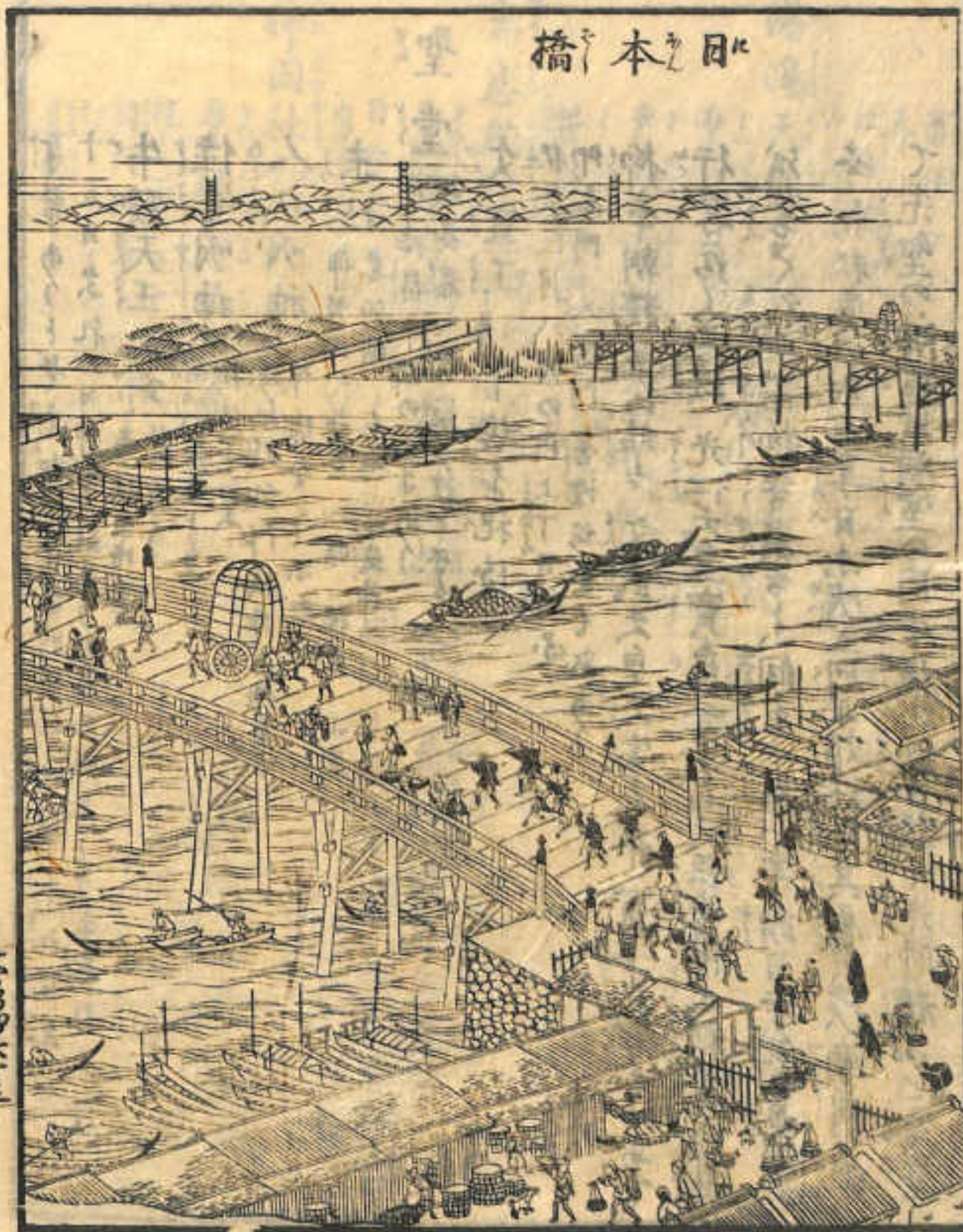
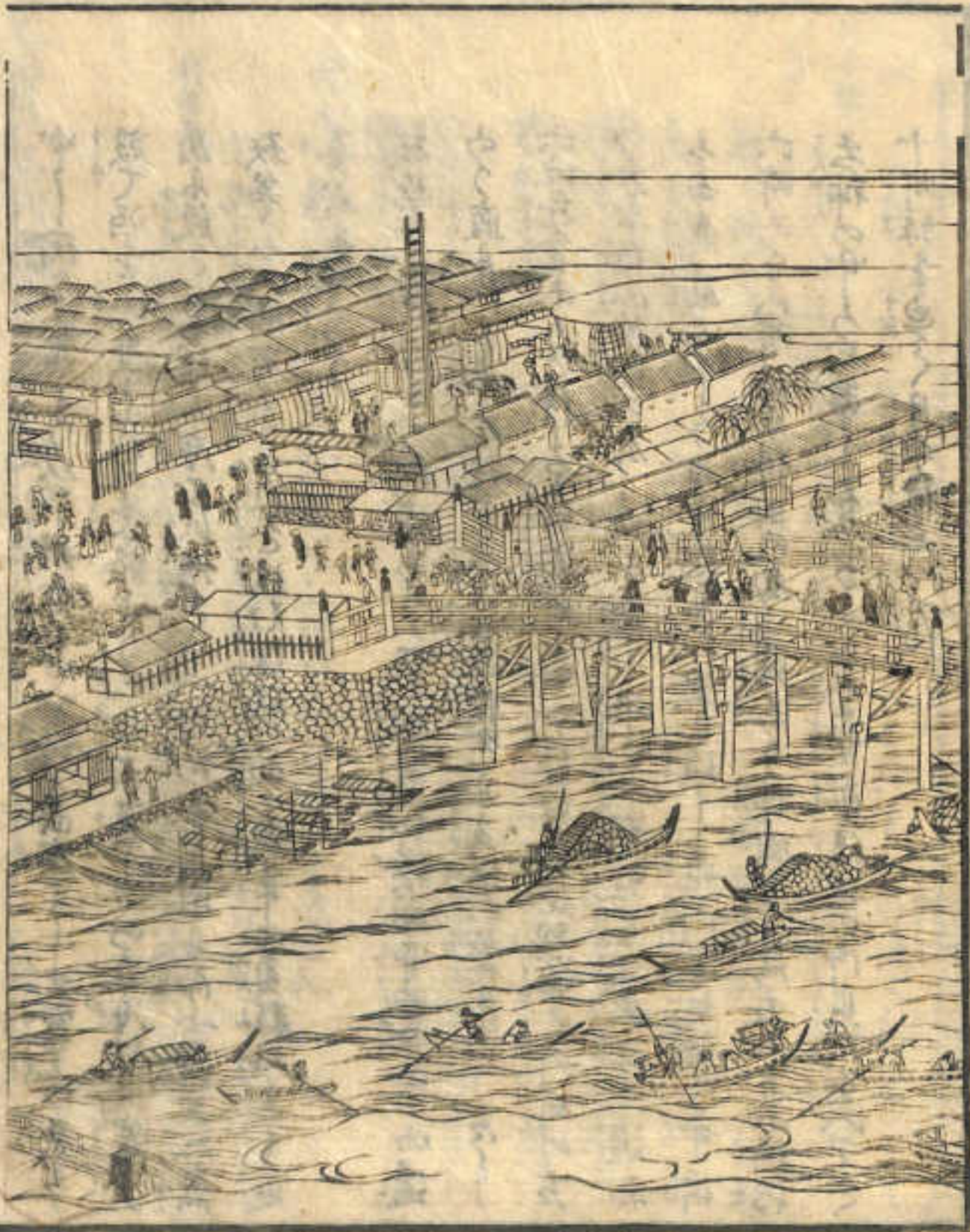


木造六士



て先聖の神座は廟室の内中楹の間と設く先師顔子と首座





日本橋

本巻四六十三



やう一園子騫より以下興有までを歸く四座より文宣王の東より  
設て西を上座より又東路より已下子夏までを立座又文宣王の  
西に設く東に上座より歸く十一座何れも南より向ふ其外魚  
教等六備府よりこれを進む陳設の品々執事の真敷何れも延  
喜式に詳あり

板橋をさくたふ川越道あり右に難司谷護國寺四谷中への道  
あり直に平尾村をさく果鴨町小立場の集落ありたり  
六地蔵堂ありと神を駒込の町よりせいの窟に過く竹町の左  
の方より山推現の處へ移るを船一追かき過たふ岩剛日光道右  
と幸郷をさくより日本橋より一里より道一森川宿に過て幸郷  
六町あり八町目日本神田の處へ移り神田廣徳左の方より湯  
天神の中より移る一右の方より堂堂能遠橋の所見附をへて  
十町餘をさく日本橋よりなり

日本橋

は色の旗宿より一兩日ほどさく移りり越く船よりありて  
くたの旗跡に過り橋の本宿より八町よりとさかぬして神橋乃  
橋一移香取の神社息栖の神と名く一麻橋より船より下て  
是て二日ほどさくして神社名所が先より又船よりと延方にさく  
板久半渡をさく麻生が村より橋並宿よりと玉造をさく小川府中  
庁舟が宿より小畑より十二塚と登りて流波山より清くまより  
の旗跡と終て日光山よりひよ中務寺二荒山より登りさくき  
の巻より紀に

新古

武蔵野より木の実ぞふれりや風の末よりん

通光

日

は末よりさくこれ武蔵野よりさく月陰

揚屋

新橋

ゆれ橋よりさくこれ白雲の夢にけむ武蔵野

藤木





